
半獸の友

景雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

半獣の友

【著者名】

景雲

N4989V

【あらすじ】

以前投稿致しました、短編と連載を一つにまとめたものです。慶國王宮金波宮。午後の休み時間、祥瓊は桓タイの官邸へ行く。そこで目にしたものは…。最初から連載にすればよいものをご迷惑をおかけします。

慶国首都堯天、金波宮。

官吏たちは午後のしばしの休息を満喫していた。祥瓊もまた、王の補佐を一旦終え、遠甫の住まつ太師府へと向かう。おそらく虎嘯や鈴もそちらに向かっていることだろう。

景王でありながら鈴とともに親友として接してくれる陽子の取り計らいで、祥瓊たちは太師府で家族のように過ごしている。そう考えると、祥瓊は幸せだと思う。女史として王を補佐する仕事は大変だけれど、しかも陽子の回りには信頼できる官吏が少ないので、他国の女史より雑用が多いけれども、今自分はなんて恵まれた生活をさせてもらっているのだろう。祥瓊は微笑みを浮かべて歩いていた。

「床拭きだつて柱磨きだつてなんだつてしちゃうわ。なんてね。」

言つて祥瓊はくつくつとひとり笑つた。

ふと、祥瓊は桓タイのことを思い浮かべた。なぜ急に彼のことが頭に浮かんだのかよくわからない。祥瓊は首をかしげ、太師府に向かう足を止めた。祥瓊は桓タイの官邸へ行くことにした。

「…………。

祥瓊は思わず絶句してしまった。桓タイは、桓タイだつたのだが、巨熊の形をとつていたからだ。慶国禁軍左將軍である彼は半獣である。普段は全くといつていいほど獣の形にはならない。王宮では尚更である。

だが今、桓タイは獸形で仰向けになり、大きな息を立てて熟睡していた。臥牀（寝台）で寝るのは憚られたのか、穏やかな陽光の射す庭院（中庭）で木漏れ日を浴びて気持ち良さそうに眠っている。その姿がなんだかかわいらしくて、祥瓊はそつと彼に近づきしばらく寝顔を拝見してみた。

祥瓊はしゃがんで頬杖をつき、しばらく巨熊の寝顔を見つめていた。これが桓タイなのかと思つと、少し違和感を覚える。

かつて祥瓊は、半獸を嫌っていた。母国の芳では半獸は差別されていた。それというのも祥瓊の父である先王が、半獸を隔てる法を設けていたためだ。

あれはまだ父が峯麟の選定を受けていなかつた頃だつた。父と母と里（街）を歩いて市場見物をしていたとき、一匹の半獸とすれ違つた。それは一切衣をまとつていなかつた。

氣味が悪いわ…。

はつきりとそう思つたことを祥瓊は鮮明に覚えている。

「祥瓊、あんなものを見るのはありませんよ。」

母は露骨に顔をしかめて祥瓊に言つた。

「はい、お母様。」

幼い祥瓊は素直に頷く。

「まったく。どうしてこういう場所で人の形をとらないのかしら。しかも裸だなんて。公衆のいい迷惑ですよ。ねえ、あなた？」

母は父に同意を求めた。父は大いに頷き、

「全くその通りだ。いくら本人の望まぬところで、半獸として生まってきたからとしても、大衆の面前では人の形をとり、きちんと衣服を身に着けるべきだ。獸形でしかも衣を纏つていらないなど堕落している証だと思うが、祥瓊はどう思うか？」「お父様のおっしゃるとおりだと思いますわ。」

祥瓊は目を輝かせて父を見上げた。祥瓊にとって、父は誇らしい人間だった。どんなことも生真面目にこなし、悪いことは悪いとはつきり指摘する。他人がそれを擁護しても、決して自分の正義感には

逆らわない人だつた。

王になつた後の父は、それにますます磨きがかかるつていつたように今では思う。

そして、ついにそれが裏目に出で、それも多大な目が出て母諸供民に討たれた。

祥瓊もまた、父母と同時に討たれるべきだつた。しかし、惠州侯の温情により生きる道を与えてもらつた。父王を諫言するどころか、芳國の民が次々に罪なき罪によつて刑場へ引き出されてゆくのを、つゆとも知らず富中で贅沢極まりない生活をしており、民の苦しみのことなど頭の中に欠片もなかつたのに。

「本当に…なんてわたしは幸せ者のかしら…。」

言つて祥瓊は桓タイの隣に静かに腰を降ろす。膝を抱えて憂えた。自身のさまざまな愚かさが頭の中を去来する。

木漏れ日が射す天氣のよい穏やかな秋の季節だつた。かすかにそよ風がふいて髪の毛が、祥瓊の頬を撫でる。それが気持ちよくて、思わず桓タイ同様仰向けになつて空を見上げた。手入れされた地面の草がくすぐつた。

祥瓊は、生かされた後柳国で半獸に出会つた。名を樂俊といつた。初対面の印象は言つまでもなく悪かつた。宿でやむなく一緒になつて食事をした。

その後、供王に追われていた祥瓊を彼は助けてくれたが、隣を歩くのも嫌だつた。

しかし、自身の罪と愚かさを樂俊に思い知らせてもらつていぐうちには、半獸に対する差別心などどこかに行つてしまつた。

そう、半獸もそうでない者も、等しい存在なのだと。

そして、景王に会いたくて、会えなくともその王の造る国が見たくて、樂俊の援助のおかげで慶国に入った。そこで何かの縁だろうか、不思議なことにまたもや半獸と知り合つた。

名を恒タイといった。

祥瓊は隣で静かに眠っている桓タイに目を向ける。芳国を出てから立て続けに一人の半獣に出会ったなんて、なんという巡り合わせだろう。

もつとも桓タイと初めて会ったときは彼が半獣だとは思わなかつたが。楽俊と違い桓タイは獸形をとることがほとんどないからだ。彼が半獣だと分かつたのは、和州の乱の折だった。

「軽蔑するかい？」乱が収まつた後、桓タイは言った。その顔はやんわりとしていたけれども、どこか自嘲するふうだつた。

拓峰の整理をしていた祥瓊は、少し一休みにと歩牆^{ぼじょう}に上がつて慶国の國土を見つめていた。そこへ桓タイが同じく歩牆へ上がりついた。祥瓊の姿を見つけると、ゆっくりとこちらへ向かつてくる。少しうつむき加減の彼の様子に不思議に思いながらも、祥瓊は桓タイのほうへ笑みを浮かべて歩み寄つた。

そして一人で慶の空を眺めているところだった。

祥瓊ははつきりと首を振る。

「だが祥瓊は芳の元公主だらう？」

半獣を受け入れる国がいくつもないことを当の半獣たちはよく知つてゐる。見ると桓タイは首を少し傾け、複雑な微笑を浮かべている。もう一度祥瓊は首を振つた。そして真つ直ぐに桓タイの目を見る。

「確かにわたしは、少し前までは半獣が嫌いだつたわ。」

桓タイは真剣な表情で見返してきた。

その真摯な瞳に、祥瓊は慶国まで旅をして來た経緯を洗いざらい話した。

「わたしはとても愚かだったの。罪深いの。桓タイは半獣だけど何も悪いことをしていない。でも忌み嫌われる。わたしは半獣ではなけれど愚かで罪深いことをしてきた。でも少なくとも宮中にはいる

間は嫌われなかつた。それって間違つてゐるでしょう?「

祥瓊の問いに桓タイは無言のまま見つめる。祥瓊は口をつぐんでしまつた。軽蔑されるべきなのは自分のほうだ。

ややあつて、桓タイが口を開く。

「主上は、俺が仕官したいと言えれば、お聞き届け下さるだらうか……。」

桓タイは堯天山のほうを仰ぎ見た。今、景王陽子は祥瓊や鈴と同様拓峰について、乱の後片付けをしている。

しかしながら本来は堯天山の頂上、雲海を貫いた場所にある王宮、金波宮にいるはずだ。だから彼は、そこへ目を転じたのだろう。くすりと祥瓊は笑う。それに桓タイは驚いて祥瓊を振り返つた。「陽子に半獸に対する差別心なんか、かけらもないわ。」

「なぜそう言い切れるんだい?」

心底驚いているふうの桓タイの表情が少しおかしくて、慶国まで来た経緯の話の中で出会つた半獸が、他ならぬ景王陽子の友達であることを話した。

「そういうことなの。桓タイ。陽子は半獸だらうとなからうと全然頓着しない王だわ。」

言つて祥瓊は再びくすりと笑う。

「ちなみに王だらうがそうでなからうが全くこだわっていないみたい。……ああでも、私は至らない王だつて何度も自分を責めていた……。」

桓タイはじつと祥瓊の顔を見つめている。その瞳は真剣だった。

「わたし、わたしは愚かで世の中のことが何も分かつていなかつた。だから今からでも勉強したいと思ってるわ。でもそれは叶わないと思う。」

祥瓊の言葉に桓タイは目を見開いた。

供王の御物(きよぶつ)を盗んだ。そうなると重い刑罰が下される。でもそれは覚悟しなければならない。

祥瓊はゆっくりと目を閉じて俯いた。

「軽蔑されるべきなのはわたしのほうよ、桓タイ。」

泣きたくはないのに目頭が熱くなり、祥瓊の頬を一筋の涙が流れた。

目を閉じた祥瓊に、今の桓タイの様子は分からぬ。

けれど、肩に温かなぬもりを感じた。

目を開けてみると、桓タイが祥瓊の肩に両手を置いている。転じて桓タイの顔を仰ぎ見ると、そこにはやんわりとした笑みを浮かべた表情があった。

「桓タイ？」

祥瓊は涙を流したまま、桓タイの顔を見つめる。桓タイは柔らかな笑みを浮かべたまま、祥瓊の目をしっかりと覗きこんだ。

「俺が仕官できたとき、主上にお頼みしてみよう。」

「頼む？ 何を？」

「祥瓊を主上のお側におけないか、その為に俺が芳国に行って今祥瓊の様子や和州の乱での働き、特に禁軍が来たときは祥瓊のおかげで助かつたんだ、そのことをつぶさに話す。そしてこのことを供王にもお伝えする。」

祥瓊は目を見開いた。その涙に濡れた瞳に、桓タイは目線を合わせる。

「祥瓊は確かに供王より罰を受けなくてはならない。しかし今の祥瓊のことをお伝えすれば、減刑されると思う。そうしていただきたいと、俺はお願いする。」

「そんな……。桓タイに悪いわ。」

なんの、と桓タイは無邪気に笑った。

「俺は祥瓊に手助けしてもらつたんだ。だからそうさせてくれ。それに、祥瓊には堯天にいてほしいと思つ。」

「どうして？」

「それは主上が手放したがらないだろうからだ。」「きつぱりと桓タイは言い切つた。

それに対して、祥瓊は迷う。心の中に、桓タイに甘えそうになる自分と、それは駄目だと拒否する自分がいる。祥瓊は胸を押さえ

た。依然として桓タイは祥瓊の肩にあたたかな手を置いている。
自分は、どうすれば、いいのだろう……。

祥瓊は秋の風を心地よく感じながら、目を閉じた。隣には桓タイの気配がする。正確には熊の気配、か？

くつくつと彼を起こさないよう祥瓊は笑みを漏らす。
わたしは、やはり、幸せ者ね。

今日一日で何回思ったか、祥瓊は今度は苦笑する。
あの頃、本来ならば一等重い刑罰を下されるはずのところを、無罪に処せられたようなものだった。

胸を押さえ、眉根をよせて再び俯いた祥瓊は、桓タイのやさしさが身に余り、心が傷つけられた気分がしていた。

こんな愚かな人間が、こんなあたたかな優しさを受けていいの？
それもつい最近まで半獸を嫌っていたのに。 「祥瓊」。

「桓タイ。」

桓タイが何かを言つ前に、祥瓊はしつかりした声音で、顔を上げ、桓タイの瞳を強く見る。

「桓タイ、ありがとう。本当に感謝するわ。でもこれはわたしの問題なのよ。」

そう、これは自分の問題、公主として自らの責任と義務を果たさなかつた自身の罪だ。 祥瓊の雰囲気は少しばかり変わっていた。芳極國がもと公主、孫昭の氣高さだ。その氣高さで、こう言い放つた。

「わたくしはもと芳の公主、祥瓊である。父王と王后である母が、民に何をしているのか知らず、また、知りうともしなかつたことは、民に対する酷い仕打ちである。我は父王が民に討たれ、母王后が恵侯に殺された後も、一人が民にしてきた残虐なことを知らなかつた、知る由もなかつたと、言い続けていた。これは我の心が醜いということである。」

「祥瓊 つ。」

また何かを言いたげな桓タイを、祥瓊は首を振つて制す。

「我は、恭国へ行かねばならぬ。

なぜなら、父王を母王后を諫言しなかつた。芳国の中を苦しみに陥れた。

それを知らず宮中で贅沢な暮らしをしており何一つ公主としての責任を果たさなかつた。惠州侯の温情を無にし、彼を簒奪者と罵つた。民の衣服を襤襤^{ほろほろ}と言い、泥まみれになつて働く姿を蔑^{さげす}んだ。恭で供王の御物^{ぎよぶつ}を盗んだ。

恭国を出奔^{しゆっべん}し、半獸に出会つたが、差別心を持ち、忌み嫌つた。

そして……、景王を恨み妬^{ねた}んだ。」

祥瓊は自分の心根、今までとつてきた行動を並べ立てた。

我ながらどれだけ性根が醜いのだろうと思う。そういうえば、惠侯も言つていたではないか。心根が醜い、と。その醜い心根を忘れてはならないと同時に、報いを受けねばならない。ならば、恭でそれにはみあう正当な刑罰^{けいばく}を受けるのは至極当然のことではないか。

「……それが、祥瓊の決断、覚悟かい。」口を挟みたかったが、耳を澄まして祥瓊の言葉を聴いていた桓タイは、言った。

祥瓊は彼を見た。彼はなんともいえない表情をしていた。

祥瓊はすでに涙を流していなかつた。澄ました顔で、桓タイを見た。

しばし二人は無言で見つめ合つた後、祥瓊のほうから口を開いた。

「本当にありがとう、桓タイ。貴方の厚意はとてもうれしい。」

彼女は目を細めてはつきりと言つた。

「さて、整理に戻らなくけや。今ごろ陽子と鈴が、怒つてるかもしない、早く戻ってきて手伝えつて。

祥瓊は桓タイに笑顔を向け、そうして歩^ほ牆^{じよう}を降りようとする。

桓タイに背を向けたとき、やや怒氣を含んだ彼の声が祥瓊の胸を貫いた。

「お前はそれでいいのか。」

祥瓊は、足を止めた。

ゆつくつと振り替えると、桓タイは珍しく眉間にしわを寄せて、射るような目で、祥瓊を見ていた。

祥瓊は少し驚いた。桓タイは大抵やんわりとした笑みを浮かべた、柔らかな表情をしているからだ。軍人、といつ雰囲気が似合わないくらいに……。

その射るような目に気をされそうになりつつも、祥瓊はあくまで毅然とした態度で言つた。

「わたしはもう、覚悟を決めたの。罪をきつちりと購うつと。」

「その気持ちは分かる。だが、かりにも王の御物に手をつけたといふことは、大逆に匹敵する罪に判じられることがあるんだぞ。ただの窃盗とは違う。実際どう判断されるかは、供王とその秋官の気分しだいだ。」

桓タイの聲音は怒つているようだけれども、どこか切実だった。彼は自分の言つていることが、祥瓊には先刻承知であることは、分かっているのだろう。

それでも、言わずに、いられない。

祥瓊はそう思うと、不意に桓タイと過ごした日々を思い出した。短い間だつたけれど、今では、すゞく良い思い出。供に鬪つた。その鬪いが終わつて、こうして二人、無事に生きて話している。

祥瓊は再び桓タイに背を向ける。

罪を悔いても、罰は、受けなければならない…………。

祥瓊はひとつ息を吐いて、芳国の、父峯王の王朝三十年の真実を語る。

「樂俊が言つていたわ。峯王は、父は、どんなにささいな罪でも許さなかつたと。物を盗んでも、田畠を放り出して芝居を見ても、死罪を賜る、と。餓えに苦しみ一個の餅を盗んでも死罪だつたし、刑吏に石を投げただけでも死罪、花鉢（花飾り）を付けて街に出ただ

けでも死罪……、そんな国だつたの！芳は！そんな国にしたのは誰？父？それとも母の父への讒言？？そつかもしれない。でも、わたしだつて芳をそんなふうにしたのよ！」

祥瓊は自身の爪で手の平を傷つけるくらいに両のこぶしを握った。彼女の心は、悔恨や自責の念、罪悪感、そういうつた感情でいっぱいになる。

「だから……！」

祥瓊がまだ何かを言おうとしたとき、背後から腕が回ってきた。

「……か、桓タイ！？」

祥瓊は驚いて硬直してしまつ。

桓タイは、祥瓊の身体に触れないように、彼女の肩に手を回していた。そして柔らかく問う。

「俺は、半獣だ。少し前の祥瓊なら、半獣にこんなことされてどう思つたと思う？」

頬にかすかに朱を昇らせた、祥瓊は答える。「……す、嫌、だつた……。」

「なら、今は？今は？」

桓タイの聲音は確実に切なげだった。

ああ。

祥瓊は彼の手を握る。この人は、ずっと差別されてきたんだわ。桓タイの手は、とても軍人とは思えないほど纖細だった。指は細く長くて、手の甲には細い筋が浮き出ている。背中にかすかに感じる身体の線は、細かつた。

それでも、巨熊の半獣だから、尋常でない怪力の持ち主なのだ。それを差別してどうする？忌み嫌つたところでどうするというのだ。この世界には半獣という人がいる。半獣として生まれてきたというだけで、どうして嫌いにならなければならないのだろう。

「わたしは、今は、半獣が好きよ。」

祥瓊が率直に答えると、桓タイは祥瓊の手を握り返してきた。

「ありがとう、祥瓊。」

桓タイの声は柔らかかった。

そのままの体勢で、桓タイは言葉を続ける。

「そう、思えるようになったということは、お前は、お前の考えは変わったんだ。なのに、人生を恭国の中終わらせるのかい？」

「それは……でも、罪は購わなくてはならないから。罪を犯せば、きちんと罰を受けなくては……。」

言つて祥瓊も心が震えた。

桓タイ、樂俊、鈴、柴望、労、虎嘯、夕暉、遠甫、景台輔、そして、陽子……。ほかにもたくさんの人間が自分を仲間だと受け入れてくれた。

しかし、別れを告げねばならない。

そう思つて胸がつぶれそうになつたとき、桓タイが柔らかく言つ。「祥瓊、お前の気持ちも覚悟もよく分かつた。あ、いや、俺みたいな単純なやつには分からんか、すまん。しかしながら、この乱の後すぐい恭へ罰を受けに行くこともあるまい。まだ猶予はある。俺たちとじばらく過ごさないか？主上も大変祥瓊のことをお気に召しているようだし。何も急ぐことはない。主上はどうやら、身分に頓着なさらないお方のようだ、俺たちのようなものにも頭をお下げになる。だから、主上と鈴と祥瓊と、仲の良い三人組に見えるぞ。」

桓タイはそう言つて笑つた。

そして祥瓊の肩に回した腕を解く。

祥瓊は振り返り、桓タイとまっすぐに対面した。そうしてその瞳を見つめる。

桓タイは笑んで、祥瓊の紫紺の瞳を見て軽く頷いた。
祥瓊もまた、大きく頷いた。

いつの間にか夕暮れ時になつていた。夕日が乱によつて殺伐としまつた、拓峰の街を照らす。

歩牆にたたずんで、祥瓊も桓タイもその光景を見下ろした。痛ましいそれをしばらく見つめ、祥瓊は桓タイに目配せして歩牆を降りていった。

祥瓊は走つて郷城へ戻つた。陽子が自分に街の人々が平伏するのを嫌がつたので、鈴と祥瓊も彼女とともに城にこもつて、そこの整理や怪我人の手当をしていたのだ。

本当に陽子は、身分に頓着しないと思つ。

城の外で整理をしていたとき、街の人々は歓喜の表情を浮かべながら陽子のところへ駆け寄つてきては彼女の足元にひれ伏し、お礼の言葉やら出会えた喜びやらを語つていた。

そういうとき、王たる者ならば彼らを見下ろし、「礼など及ばぬ、全ては私の至らないところあつての故でこのような惨事になつてしまつたのだ、さあ、顔を上げて休むがよい。長い間虜げられて來たのだから。」

というような応対をするものではないだろうか。

ところが陽子は逆に街の者に深々と頭を下げていた。そして慌てたように、

「いいや、私が不甲斐ないばかりに本当に貴方たちに苦労をさせ、悲しい思いをさせてしまつた……。本当に、申し訳ないと思つている。」

と言い、彼女はしゃがんで彼らと目線を合わせようとする。

その王らしくない以外な態度に、街の者たちは思わず顔を上げぽかんとしていた。

さらに陽子は顔を上げた人を立たせて、休んでくださいと言つた。

つ城へと促していた。祥瓈は半ば呆れた。これでは王の意義も何もないではないか。しかしそう思いつつも半ば嬉しかった。あれほど会いたかった景王が、眞面目で、民の目線に立つて物事を視ようとする娘であるといふことが。

祥瓈はあらためて心中で楽俊に感謝した。彼に出会つていなければ、今でも景王を 阳子を恨んでいただらうから。

でも今は違う。

自分は景王阳子の友達でいたい。

それに、桓タイとも 。

「ずっと戻つてこなかつたから何かあつたんじゃないかと思つたわよ。」

郷城に戻ると、真っ先に鈴が心配した表情で駆けつけてきた。その大きな瞳にわずかながら涙が見える。且一杯心配してもらえたのだと思うと、胸が熱くなつた。

祥瓈は慌てて詫びる。

「ごめんなさい。ちょっとね、桓タイと話してて。」

鈴の背後を見ると、阳子も片付けをしていた手を止めて、心配そうな顔をしてこちらを見ていた。

「阳子にも、心配かけてごめんね。」

言つと、いいや、という短い返事とともに、ほつとしたような微笑が返ってきた。

少しして、王師が戻り、遠甫が無事に戻ってきた。

正門へ向かい、小さなその老人を阳子は丁寧に出迎え、話をする様子を、祥瓈は角楼で鈴とともに見つめていた。あの「老人が柴さい望」とその上方、浩瀚、そして勞の師なのか。名前は聞いて知つていたが、実際に姿を見るのは初めてだったので、聰明で深遠な知識をお持ちの方だなどいうのが第一印象だった。

「……老松……。」

ぽつりと鈴が声を漏らした。祥瓊は弾かれたように鈴を見る。

「鈴、あの方は……。」

まさか、あの方は。鈴は角楼から身を乗り出すよにして、その老人を見ながら言つ。「ねえ、祥瓊。あの人、麦州産^{ばくしゅう}県支錦^{しきん}の……、伝説の、飛仙^{ひせん}なんじや……？」

問われても祥瓊にだつてわからない。けれどその可能性は高い。

その伝説は桓^{あわな}タイから聞いた。昔、その地に降り立つた徳の高い老松という字の飛仙があつた、その飛仙は野^やで道を説いたと。しかし今では伝説になつていて、「だが、昨年焼き討ちに遭つた松塾^{じょくじゅく}の教師に、あの老人がいた。松塾^{がほつ}は“学”ではなく“道”を教えていた。しかも和州侯^{わしゆこう}呀峰の命令で遠甫の里家が襲われたとき、彼は“殺されずに”さらわれた。そう考えるならば、彼は仙だ。襲つた連中は簡単に殺せなかつたのだ。つまり遠甫は、その伝説の飛仙、老松だ。けれど間違つているかもしれない、自分の考えは、合つている可能性のほうが低い。

しかしそく見ると彼はそこいらの人間にはない雰囲気を漂わせている。

祥瓊はそう言つて感慨深げに目を細めると、隣で鈴が深く吐息をついた。

「陽子は、老松……遠甫に教えを受けていたのね……。」

「そうね……。」

祥瓊もまた、軽く息を吐いた。ふと祥瓊は思い付く。

「陽子は遠甫の正体を知つていたのかしら?」

鈴は祥瓊に向き直る。「それはあり得ないわ。だつて麦州侯を罷免しちゃつたのよ?」

言つて苦笑した。

「ああ、そうだつたわね。」

祥瓊もまた苦笑した。陽子 景王が遠甫の正体を知つた上で、勉強しに市井に紛れて、遠甫の里家に身を寄せていたのなら、麦侯が

受けた、せいきょ 靖共派による罪の捏造など、とつぐに判つたはず。麦侯浩瀚に対する誤解は解けていたはずだ。なぜなら彼は松塾の出身なのだから。

「どうして知らなかつたのかな？」

鈴が呟くと、祥瓊も首を傾げざるをえない。知つていれば浩瀚を麦州侯から追い落としたまにするとはなかつただろうに。

そもそも陽子が遠甫の里家へ入つたところから疑問である。この世界のことや政治経済、市井のことを知りたければ他にも道はあつたはず。にも関わらず遠甫 老松のもとでこちらのことを教わつていたということは、遠甫を陽子に紹介した人物がいるということだ。

だがそれはいつたい誰だ？王宮の中で陽子は、傀儡かいらいだと自ら言つていた。官吏の信用がない、と。ならば諸官ではありえない。

そこまで考えて祥瓊は目を見開いた。

「……台輔だわ。」

祥瓊が呟くと鈴が、え、と声を上げた。

そう、景麒だけは陽子を無視するはずがない。例え信用していないとも、麒麟は王に逆らえない。そういう生き物だから。陽子が、こちらのことを何一つ知らないから、街で暮らしてみたい、というようなことを言つたとき、景麒は最初は反対しだろう。何しろ登極したばかりで大事な時期だったのだから。しかし、最終的には景麒は景王に逆らえない。あるいは、陽子のことだ、きちんと景麒に動機を説明したのかもしれない。だから陽子は、景麒の理解を得、遠甫に教えを請えるよう景麒の手配で、遠甫の里家に入れてもらうことができたのかもしれない。つまり景麒は、遠甫と浩瀚と面識があつたのだろうということだ。そして景麒は、遠甫の出自などは陽子に詳しく教えなかつたに違いない。なぜなら陽子は麦州州侯浩瀚に対して悪感情をもつっていたのだから。

そう祥瓊は鈴に言つと、彼女はなんとも言えぬ複雑な顔をした。

「景台輔つて、どんな方なの？」

顔をしかめて問おてくる鈴に、祥瓊もまた口元をひきつりせる。

「わたしに聞かれても困るんだけど…。」

祥瓊も鈴も、景麒のことは全くと言つていいほど知らない。禁軍がやつて来たときの、転変した姿を見ただけだ。

「お声は聞こえたわよね。」

肩をすぼめて祥瓊が鈴に聞くと彼女はうなずく。

「この言つてはなんだけど、景台輔つて冷たそうね。」

「鈴つ……！」

「だつて台輔がもうけよつとちやんと陽子に説明してれば、結果はもつと違つた形になつてたかもしれないわ。」

言つて鈴は拓峰の街に視線を移した。その言動で祥瓊は悟る。

この和州の乱でたくさんの命が奪われた。陽子は奸臣かんじんを更迭するこことや州師を動かすことなどの権限が、ないと言つていた。普通王ならばこれらのことなどたやすくできるのに。しかし、できない、と。そんなはずはない、と祥瓊が言つと、陽子は自嘲気味に、元無能だから、胎黒だから、女だから、王としての権限を官吏によつて制限されているのだと言つていた。

そんなとき陽子にとって頼りになるのは景麒だけだつただろう。王宮の中で、たつた一人だけ信用できる僕しゃく。その僕がきちんと説明してくれずにはいれば、登極したばかりの王は王宮のことも諸官諸侯のこととも、そして政のことも解らないだろう。ましてや陽子は胎黒だ。王座のことよりまことにこちらの常識から知らない。しかも慶は女王に恵まれない。これらの重苦を背負つていたのだ、陽子は。

そしてこの乱で、多くの命が亡くなつた。「王さまをやるものつて大変ね。」

鈴も同じようなことを考えたのか、ぽつりと言つた。これに対して祥瓊は、ええ、とだけ答える。

父王を思い出した。父も陽子のようになたくさん悩んで、自らを追い詰めて追い込んで失道して、拳げ句、民に憎み恨まれながら殺さ

れた。父が悩み苦しみ、民が過酷すぎる刑罰に恐怖している間、祥瓊は高中深奥で、何も知らず優雅に遊んで暮らしていた。今思えば、父母の反対を押しきつてでも、父の政策を目にし、街に降りて民の様子を知るべきだった。その努力をするべきだった。そうすれば、父の苦しみを和らげてあげられたのかもしれないのに。祥瓊はどうとも言えぬあたりを見据えた。

「本当に、玉座を維持していくのは大変なことだわ、鈴。」

「…………うん。」

鈴は少し俯いて答えた。

すつかり日が落ち、祥瓊と陽子と鈴は郷府の一郭の、下人らしき者の臥室（寝室）を借りて、寝支度をしていた。

鈴は正直に、王さまは大変ね、と陽子に言った。陽子は素直に肯定した。

それから陽子は祥瓊たちにこれからどうするのか聞いてきた。祥瓊も鈴も、景王に会う、という目的は達成された。しかしその先のことは考えていなくて、一人して少し考え込んだが、すぐに鈴は才国へ戻つて采王に礼を言つと言つた。

彼女に対してもう戻る場所はない。故国の芳国へ帰つて、全ての民にお詫びを言つて頭を下げたいが、そんなことで彼らに許してもうれるはずもなく、しかも自分の身柄はすでに恭国へ引き渡されたことになっている。

そう思つて天井をにらんだとき、樂俊のことを思い出し、彼との約束を果たさなければならぬと言つた。樂俊は本当に陽子のことを気にかけているのだとこのとき初めて気づいた。そして雁国へ行つて樂俊に慶の状況を伝えるのだ、と陽子に約束のことを言つた。しばらく静寂があつて、陽子は“良い国”について聞いてきた。すぐに鈴は単純に、昇縞しょうじまみたいな奴のいない国だと答えて陽子は苦笑したが、彼女はもっと真剣に考えていて具体的な答えを求めてきた。自分達ならどんな国に住みたいか、どんなふうに生きたいか。

だから祥瓊は、ひもじいのや他人に辛く当たられるのは嫌だ、と答えた。鈴も真剣になつて同意する。一人してこんなことされると嫌ね、とか、嫌なことを我慢するの、やめればいいのにどんどん内側に向いてしまつて、とか、そつそつうんうんと言つていると、鈴が慌てて、これは参考にならなくてごめん、と陽子に言った。

しかし陽子は何かを考えているふうの仕草を止めて、顔を上げ、

参考になつた、と鮮やかな翠の田を向けて言つてくれた。
それから陽子は祥瓊と鈴の今後について聞いてきた。

これが問題なのだ、祥瓊にとつて。

鈴は恐らく街で暮らすのではないかと思つ。仙籍を返上し、市井で戸籍をもつて里家に入るのではないか。彼女はもう、海客だからといって自分を不幸な人間と思い込んで、泣いて生きるような者ではない。仙籍から抜かれても、市井で苦難に立ち向かつて生きていくだろう。言葉が通じなくなるが、今度はしつかりとこちらの言語を学ぶだろう。

それに對して祥瓊は、いづれ恭国へ行かなければならぬ。雁から慶へ戻つた後、しばらく桓タイのもとで過ごさせてもらうことは彼との約束で確實だが、いつまでも厄介になるわけにもいかず、その間何もしない訳にはいかない。

それで世の中のことを勉強したいと言つた。すると、あたしも、と鈴が同意して、学校に行きたいのではなくいろいろなことが知りたい、だが松塾がないのでその術がないと言つた。

松塾。遠甫 伝説の飛仙、老松が教えていた義塾。学塾ではない、“道”を教えるための塾。麦州侯浩瀚をはじめ、たくさんの中優秀な人物を輩出したことで、慶でも高名なその塾に通えたらどんなに良かったろう。きっと多くのことを学べたに違ひないし、それに伴いいかに自分が物知らずか思い知らされただろうに。

祥瓊と鈴が残念がつていると、陽子が碎顔してとんでもないことを見一人に勧めた。

それは、遠甫を三公の首おびとである太師に迎えるから、金波宮で働きながら彼に学ばないか、ということだった。

祥瓊も鈴も驚愕した。

たつた今思つた老松に、教えを請つことができる。のみならず王宮で働くということは、下官になれということだろうか。

王宮に仕える者たちは一部を除いて仙籍に入る。そして王や麒麟

と同じく不老長寿となつて王にお仕えするのだ。それは、官位が上だらうが下だらうが同じである。

祥瓊と鈴は顔を見合わせ、同時に陽子を見た。すると彼女は真剣な表情になつて、翠の眼をひたと一人の眼に合わせてくる。

そして信じられる人が一人でも多く必要なんだと言つた。

そのとき祥瓊がとつさに思い浮かんだのは桓タイのことだった。

「虎嘯や桓タイは？」聞くと、もちろん処遇を考えると陽子は言つた。

祥瓊は胸が高鳴るのが自分でも分かつた。半獸の桓タイが仕官できる！

祥瓊は自分のことのように嬉しかつた。

陽子は繰り返し、王宮の中で自分には信頼できる人が、一人でも多く必要なんだ、と言つ。

祥瓊は桓タイのことを想いつつ大きく息を吐いて、「しうがないわ、行つてあげてもいいわ。」

と言つた。こんな言い方をしたのは照れ隠しだったからなのかもしれないし、本当に王宮に入つてもいいものかどうか、半信半疑だったからなのかもしれない。

すると鈴も茶目つき気を含ませて、陽子がどうしてもつて言うんなら助けてあげないでもないかな、と言つていた。鈴も思つてもみない処遇に、戸惑つているのだろう。

だが、陽子は真剣だつた。手を合わせて祥瓊と鈴を交互に見ながら、どうしても来てくれ、と懇願した。

祥瓊も鈴も陽子の立場を思い、彼女の願いをきちんと受け入れた。

そうしたら鈴が笑つた。つられて祥瓊も忍び笑う。陽子も笑顔を見せて、三人の笑い声が臥室（寝室）を満たした。

慶国首都、堯天。金波宮。春の始めの頃。内殿より奥の宮の一室で、遊学から帰還した慶国国主景王は、複数の人物と丸い卓子（みや）

机）を囲んで何やら計画を練っていた。王を上座に据えて卓子の回りを取り囲むのは宰輔たる麒麟はもちろん、老人から少年少女まで、様々な人間だった。その房間（部屋）はさほど広くない一室で、扉を開けてすぐに丸い木製の卓子が見え、その回りにはやはり木製の椅子が並んでいたが、今はそれは隅に退けられている。向かつて左側には掛軸と壺があり、その掛軸には水墨画のようなものが描かれていた。

それを背に王が立ち、王の目線からは向かいの窓ごしに雲海の眺めが堪能できる。もつとも今は人が卓子を囲んでしまっているので見えないが。

王は回りの人物と話し合いながら卓子の上に広げた書面に目を通す。その左右で、老人と紺青の髪の少女が交互にその書面を読み上げていく。途中で王は少女に書面の単語や文章の意味を解説させていた。また、時折王は老人に話しかけ、次いで三十前後の官服を着た男に相談を持ちかけた。彼は淡々と、論理的かつ丁寧に、王の相談に答える。その彼に四十くらいの威厳のある、やはり官服の男が話しかける。一人の隣で二十五、六の官服の男が黙つてそのやり取りを見ていた。すると王は彼と老人に「一人の性格や気性、民に対する想いなどについて聞いた。若い男のほうは一人の為人を保障し、老人のほうは自分の目で見て話をして、判断するのが良い」と答えた。これに対して王は素直にうなずいた。そうして王のほうを向いた男二人にしきりに話しかける。王はその強い翠の瞳で彼らを見上げて質問をしたり相談をしたりした。

しばらく王と二人の男の会話が続き、分かつたというように王は大きくうなずいた。

そして王は、長い黒髪を一つにまとめた少女に目を向け、女御に任じる、と命じた。女御とは王の身辺の世話係である。位は下級だ。それに任じられた少女は緊張しつつも深く頭を下げ、ありがたく命令を受け入れた。

それから王は大男に視線を向ける。彼は身の置き所がないという

ふうに始終緊張して、この場で身じろぎをしていた。その隣で大男の弟、十四、五ぐらいの少年が同じく緊張しつつも、平静を装つて兄をたしなめていた。王は大男に責人、特に始終王や宰輔を守護する大僕たいぱくに任じる、と命じて、大男は目をぱちくりさせた。その様子に王は彼に、要するに自分を守護してほしいと言つた。納得した彼はその大きな体を小さく丸めるようにして返事をした。すると彼はすぐさま弟に叱られ、慌てて頭を下げる。その様子を見て王は軽く笑う。周囲の者もつられて忍び笑つた。

そのとき、三十前後の男が眉間にしわをよせて、この場にいる全員に提案をする。

それは、王の近くに少しでも信用の置けぬ者を配してはならないよつにする、というものだった。

これに対し王は何もそこまで、と反対したが彼は自分の提案の理由を詳細かつ簡潔に説明した。王は彼から目を離し他の者たちを見る。

すると紺青の髪の少女と長い黒髪をまとめた少女が彼の提案に強く同意した。一人は絶対にそうしたほうが王の御身のためだと力説した。それに圧倒された王は、この“友達”に感謝した。そしてこの提案はこの場にいる者すべての合意を得て、全会一致で決定したのである。

再び王は書面に目を移す。隣で紺青の髪の少女がそれを読む。不意に王はその少女を、女史じょしに任じたい、と言つた。彼女は目を見開いた。女史とは王の近辺に仕えて執務の手助けをする、最下級の文官である。驚く少女に王は笑みを向け、そして言つ。

「これからは私の側でこつやつて書面を読んだり文章を書くのを手伝つたりしてもらえるとうれしい。」

彼女は目を見開いたまま、ちらりと二十五、六の男に視線を投げた。すると彼は碎顔して大きくうなづいた。

それに勇気をもつたのか、彼女は王に感謝しながら深く深く頭を下げ、女史になることを受け入れた。

そんな彼女を王は目を細めて眺めた。

次に王は現在の王師について切り出した。和州の乱での彼らの振るまい、行動にはこの場にいる誰もが激怒しているし、それだけのことを探らはやってのけた。

今の禁軍をなんとかせねばならない、そう言つたのは三十前後の男だった。すぐに横にいる四十ほどの男と、一十五、六の男が陥しい表情になつてうなづく。皆も一様に怒つた顔になる。

王は言う。乱を起こす前に昇紳しょうしんを更迭するよう景麒に言つたが、更迭する理由と証拠を出せと諸官に言われ、更迭できなかつた。ならばと、玉璽ぎょくじある書状を出したがそれも役には立たなかつた。せめて瑛州えいしゅう師を貸してほしいと願つたが、何がどうしたのか、軍事を司る州司馬と州師三將軍はみんな急病だと言つて出陣を拒んだため、動かせなかつた。

これを聞いたこの場の者達は、愕然がくぜんとする者あり、眉をひそめる者あり、怒りをこらえる者ありと様々だつた。

対する王は至らない自分を責め、皆に詫びて頭を下げた。それを見た者達はしかし誰も王を責めたり罵つたりしなかつた。

そこでまずその州師をどうするか、議論が交わされた。州師をこのままにしておくわけにはいかない、というのは勿論誰もが持つ意見である。様々な意見が出される中、いつそのこと辞めさせてしまえばいい、と言つてのけたのは、大男と三十前後の男だった。前者は意見を言つてすぐに慌てて口を引き結んだ。それを見た後者はくすりと笑つて大男と視線を交わした後、王に向き直つて自分達の意見はいかがかどうか問う。

王はしばらく思案した後、うなずいて意見を受け入れた。すると宰輔がこれに反対した。曰く、急に辞めさせることもあるまい、降格処分ではどうか。でなければ彼らにも立場というものがあり、急に辞めさせられると路頭に迷うだらう。

これに対して、紺青の髪の少女が声を上げた。州師は王の言うことを聞かなかつた。州司馬と三將軍が一度に急に病気にかかつたな

ど、嘘に決まっている。彼らにはそれ相応の処分が必要だ。別に死刑に処すわけではない、辞職しても彼らにはまだ道がある。

しかし、と尙も反対する宰輔に、今度は長髪を一つにまとめた少女が言った。王宮に残しておけば彼らは王に何をするか分からぬ。降格されたことで王を怨み、謀反を企むかも。

これを聞いた宰輔は詰まった。撫然とした表情を作る。

そんな宰輔を見て王が突然笑い出した。宰輔と一人の少女はもうろん、他の者達までどうしたことかと驚く。その様子に王は言った。

「景麒は心配性だからな。」

宰輔はさらに憮然として王にうらんだ。

「何を仰ります。」

「だつてよく言つてたじやないか。危険なことはするな、とか自重してくれ、とか。…ああ、私にも安心できる場所にいてくれ、とも言つていたな。」

「それは主上がご自分の立場を充分に理解しておられないからでしょう?」

「私の立場とは何だ?」

「この国の王です。」「うん。その通りだ。」

「いい加減になさつてください。」

僕が本気で怒りそうなのを察知して王は苦笑した。

「悪かつた、悪かつたから。いつも心配かけてすまない。」

王が宰輔に軽く頭を下げて謝ると宰輔はそれに目を背けて言つ。

「別に心配などしておりません。」

すると王は眉を上げた。

「けれどお前の使令が言つていたぞ? 収輔が心配しておいででした、と。なあ、驃騎?」

少し沈黙があつて、宰輔の影から、是、という返事があつた。それに宰輔は瞬時に自分の足元へ向けて眉をひそめる。

「驃騎!」

声を上げた宰輔に王は再びくつくつと笑う。それにかぶるよつこじ

て、別の声が宰輔の足元から忍び笑うのが聞こえた。

「……班渠。」

溜め息をついて片手で顔を覆う宰輔に、王は笑いをとめた。

「すまない、ありがと。景麒。」

宰輔は撫然とした。

王は改めて皆に目を向ける。どの顔もぽかんとしていてそれに苦笑しながらも、瑛州師については三將軍には辞職させることにすると言った。宰輔はもう何も言わなかつた。

いつの間にか日が傾きかけていた。

それでとりあえず計画は明日に回すことになつた。

祥瓊たちは金波宮内で、房室（部屋）を「えられた。それも王や麒麟が住まう建物の近く、つまり王宮の奥のほうに、である。

それはもちろん仮住まいではあるが、虎嘯と夕暉の兄弟には一人で一房室を与えられ、浩瀚、柴望（さいぼう）、桓タイの三人も一緒に一房室を割り当てられた。

祥瓊と鈴も二人で一房室を与えられ、遠甫は一人で一房室を「えられた。

祥瓊は疲れなかつた。豪奢な臥牀（寝台）、そして美しい天蓋（てんがい）。そこから落ちる白く薄い絹の御簾（みす）。だだつ広い房室（部屋）。三十年も後宮でこの房室よりももっと広い房室で過ごしていたのに、いや、小降りな建物を一つもらつてそこで贅沢三昧していたのに、この広くて豪奢で贅を尽くした房室で寝るのが本当に落ち着かない。ここはわたしのいるべきところじやない。思つて起き上ると、突然左隣で静かな声がした。

「……眠れない？」

声の主のほうを見ると、祥瓊と同じように臥牀から上半身を起こした姿が、薄い御簾越しに見えた。

「ええ。……鈴も？」

問い合わせると影はうなずく。そして手を伸ばして御簾を軽く引く。影が顔をのぞかせた。祥瓊から見て、左手の窓から差した月明かりが影にあたり、困ったような顔をした鈴が見えた。

それで祥瓊も臥牀から降りて御簾を引いた。そして靴（靴）をはいてそこから離れる。靴音がきれいに磨かれた床に、静かに響いた。祥瓊は床を見る。月光に照らされたそれには、茶褐色の色合いにどこにも塵やほこりは存在しない。きらめくほどに美しかった。

祥瓊は静かに窓に歩み寄る。月光が目に染みた。目を細めつつ窓

辺に寄ると、美しい雲海がどこまでも続くのが見えた。少し右上を見ると、ほほ満月の光りが雲海を照らしていて、より一層美しかった。

そこへ鈴が祥瓊の隣に立つた。

「……きれいね。」

鈴が窓に手を当てて、まじまじと雲海を見てつぶやく。

「あたし、長い間雲海の上で暮らしてたけど、いつもやつてゆつくりこんな景色を見たことはなかつた。」

「そう……。」

ゆつたりと波が押し寄せでは引いていくその様子を眺めながら、祥瓊は静かに返事をした。鈴は窓から手を引く。それを見た祥瓊をどこか痛ましそうな目で見た。

「……祥瓊は……。」

鈴は言葉をとぎらせる。唇を引き結んで、俯いた。

鈴が何が言いたいのか分かる。それで祥瓊は笑いながら言った。

「何度も見たわ。こんな景色。王宮の、ここよりもっと奥で。それは美しかつたわ。何度見ても飽きなかつた。だって一日だって同じ眺めにならなかつたんだもの。」

そう、祥瓊が見ていた雲海の景色は美しかつた。だが別の場所で見た雲海のそれは、美しいどころではない。むしろ惨かつただろう。

鈴は問い合わせるように祥瓊を見る。祥瓊は言葉を続けた。

「鈴、こうこう景色を眺められる人は、それにみあつ責任と義務を背負わなくてはならないの。」

「うん……。」

「わたしはね、その責任に気づかなかつた、義務を果たさなかつた。王宮で遊んで暮らして、父王と、王后である母を諫めなかつた。何も知らなかつたの。国のこと、父と母が何をしているのかも、民のこと、公主のことさえ。公主だつたのに。」

鈴は何も言わない。ただうつむいて、痛みをこらえているふうだった。

「樂俊がね、そんなわたしに言つてくれたの。芳の公主はもう罰せられた。わたしはもう公主ぢゃない。知らないことならこれから知ればいいって。全然問題ぢゃないって。」

鈴が顔を上げた。月光がその顔にあたる。

「じゃあ、もう祥瓊はずつとあたしたちと一緒にいられるわよね？
陽子とあたしと祥瓊と……ずっと……。」

その言葉に、祥瓊は不意に涙が出そうになつた。

祥瓊は首を振る。

「わたしは供王の御物を盗んだの。それはね、王の玉体（めいたい）に手をかけたのと同じことなのよ。」

鈴は顔を歪めた。鈴の眼は黒い。いつもは漆黒に見えるそれが、今は月光にさらされて茶色に見える。そのせいでも普段は見えない瞳孔が、はつきり見えた。

その眼がゆがんで、大きな両目から涙があふってきた。鈴は慌てて袖で涙をぬぐう。けれどぬぐつてもぬぐつてもあふれてくるようだつた。

「ごめんなさい、鈴……。」

鈴は大きく首を振った。何度も。

「謝るべきなのはあたしのほうなの。あたしが泣いても仕方がないのに、涙があふれてしまうがないの。『ごめんっ、祥瓊、ごめんねっ。』

言つて鈴は祥瓊を抱きしめる。

「泣きたいのはあたしじゃないのにっ。『ごめんね。』

「……鈴っ！」

祥瓊も鈴の体に腕を回した。すると鈴の腕に力が込められる。

「この涙は自分を哀れんで泣く涙なの。祥瓊と一度と会えなくなるかもしれないことを悲しんでる自分を哀れんでるの。だから『ごめんなさい、祥瓊、あなたのために何もしてあげられない。こんな涙を流して、……また、清秀に叱られちゃう。『ごめんなさいっ。』泣いて何度も謝る鈴の背を、祥瓊はなでた。『ううん、わたし、う

れしい。鈴が、わたしのために泣いてくれているんだもの。鈴自身は自分を哀れんでるって言うけど、わたしはそう感じていないうわ。わたしのために、ありがと……。」

祥瓊も涙を流した。鈴は首を振る。

「うん、お礼なんて言われるほどあたしは祥瓊のために何かができるない。やっぱり自分を哀れんでるだけなの。本当にそつなのがめんね。」

もう一度謝つて鈴は祥瓊の体を離した。それで祥瓊も鈴を抱きしめていた腕を解く。

鈴は袖で思っきり涙をぬぐった。そして祥瓊の顔を見つめる。「…陽子が、なんとかできないかな…。」

鈴の言葉に、桓タイの言葉がよみがえる。

王上にお頼みしてみよう。

柔らかい声と、やんわりとした笑みが思い浮かぶ。

俺が供王にお願いしてみる。

祥瓊は桓タイとの話を、鈴に話した。

「減刑を願つてもらつたところで、供王がそれに応じてくださる可能性は低いわ。」

むしろあの王は立腹するだろ。それに今でも祥瓊を追つているに違いない。

「でも、可能性がないわけじゃないんでしょ？ そうドしょ？」

鈴は言つて一度言葉を切る。

「…うん、可能性がないわけじゃないわ。だって今の祥瓊は公主の祥瓊とは違うもの。祥瓊は祥瓊だけど、公主のときは違う考え方を持つようになったて、だから、…ああ、どう言つたらいいのか分からない。」

言つて頭を抱えた鈴に、祥瓊は苦笑する。

「確かにわたしは公主のときは違うわ。わたしの考えは変わった。樂俊のおかげなの。でも、それでわたしの罪がなくなるわけじゃない。」

鈴ははつとして顔を上げた。それに祥瓊は微笑つてみせる。
「いずれ必ず恭国へ行かなくてはならないわ。だつて罪を購うこと
なく景王朝を汚すわけにはいかないでしよう?」
「でもそしたら祥瓊は……。」

「ええ、どうなるか分からない。」

祥瓊の言葉に、鈴はまた泣きそうになる。それをこらえて、大きな
目で祥瓊をひたと見据えて言つた。

「あたし、陽子にお願いしてみる。」

「……鈴……。」

祥瓊は胸にせりあがつてくる熱いものを感じた。

わたしのために、桓タイも、鈴も、陽子も、懸命になつてくれて
る。陽子は、わたしに女史を任じた。だから桓タイと鈴の願いを聞
いてくれるに違いないわ……。

「ありがとう、鈴。実は、わたしも人生を牢の中で終わらせたくない。
い。だつて、鈴や陽子や桓タイと、このまま一度と会えなくなるな
んて嫌よ。」

鈴の言づとおり、可能性がないわけではない。祥瓊は鈴の手を取る。
「陽子はわたしを女史に任じてくれた。わたしはそれをはつきりと
受け入れたわ。陽子の、女史に任じてくれたときの言葉を、わたし
は裏切りたくない。桓タイと鈴の気持ちも、無駄にはしたくないわ、
決して。」

言つて鈴の手を強く握る。鈴は祥瓊の手を持ち上げるようにして、
強く握り返してきた。「祥瓊、あなたが恭国から無事に帰つてくる
ことを、一身に願つてるわ。」

言つて鈴は少し俯ぐ。

「そんなことぐらいしか、できないけど……。」

「いいえ、うれしい。鈴、ありがとう。」

祥瓊は鈴の手を握つたまま、頭を下げた。

翌日。再び昨日と同じ房室（部屋）で、朝から景王陽子は丸い卓子（机）の上に書面を広げていた。その卓子の回りを昨日と同じ顔ぶれが取り囲んでいる。

本格的に春が近づいてきた。王宮にはぬるい陽射しが射し込んでいる。陽子から見て卓子を挟んだ向かいの窓が、半分ほど開いていて、爽やかな風が潮の匂いを運んでくる。

「昨日は瑛州師えいしゅうしの件で話は終わったな。」

陽子は言つて、一枚の書面を取り上げる。しばらくそれを見つめた後、祥瓊のほうを見た。

「悪いが、読んでくれないか？」

複雑そうな表情に、祥瓊は陽子の取り上げた書面を声に出して読む。

「……すまないな、祥瓊。私は、こちらの文章が読めないから。」

言つて軽く頭を下げる陽子に、祥瓊は笑つてみせた。

「まだ仕方ないわ。」

祥瓊の言葉に、陽子は苦笑した。

そして改めて書面を見た陽子は、昨日から練つていた計画を進める。

「瑛州州師三将軍が失われた。なのでこれを埋めなくてはならない。」

言つて陽子は卓子を囲む顔ぶれを見渡す。

「皆はどう思う？」

「瑛州は台輔の御領じょうりょうです。しかし州師については主上のものと言つて良いでしよう。浩瀚こうかんさまの仰るとおり、信用の置ける人物を据えるべきかと存じます。」

陽子の問いに、柴望しばぼうが答えた。それに陽子は眉を寄せて考え込む。彼の言う“信用の置ける人物”がいないのだ、陽子には、実際この場にいる者たち以外はほとんど信用できない。

陽子は軽くため息をつく。そしてふと、軽く田を見開いた。

「そういえば禁軍についても考えなくてはならなかつたんだ。」

その言葉に台輔は陽子をねめつけた。

「まさか禁軍二将軍まで辞職させるおつもりではございませんでしょつね？」

「まさか。」

陽子は苦笑した。

「そんなことをすれば私の周りから軍がいなくなる。」

景麒は安堵の息をはいた。

「台輔はじつやこいつも主上を心配していなければならなつよりますね。」

言つたのは桓タイだつた。景麒は憮然として桓タイを見る。その表情に、桓タイは身をすくめて謝つた。

「申し訳ございません。言葉が過ぎました。お許しを。」

深く頭を下げる桓タイの額に、軽く冷や汗が浮いている。祥瓊はなんとなく彼を哀れに思つた。

そのとき、そうだ、と陽子が声を上げた。皆が一齊に彼女のほうを向く。

「桓タイ、お前を禁軍左軍將軍に任じる。」

「は？」

「だから、桓タイには禁軍將軍として私に仕えてほしい。」

ここやかに桓タイの顔を見る陽子を、桓タイは啞然として見返した。

しばらく、場に沈黙が降りた。

陽子は眉を上げる。「なんだ？何か不都合でもあるのか？」

回りを見回した陽子に、桓タイはさらに汗を浮かべて言ひつ。

「主上、私は、その……。」

言つて言葉を切る。ん、と首を傾ける陽子に、恐る恐る言葉を続けた。

「私は、半獸ですが……。」

「それがどうかしたのか？」

「…良いのですか？」

「何が悪いんだ？」

陽子は瞬きをして桓タイを見つめた。桓タイも陽子を見つめ返す。二人はしばらくお互の顔を凝視しあつた。やがて先に動いたのは陽子のほうだった。ああ、と言つて苦笑する。

「どうか、その前に半獸を隔てる法を撤廃しないといけないな。」

言つて鈴をちらりと見る。

「同様に海客…、そして山客に関する法も撤廃する。これは勅令で出す。……誰にも文句は言わせない。」

陽子の最後の言葉は、この場にいる誰もが硬直するほど強い意志を持つていた。

『ぐり、と誰かがつばを飲む音がしたが、台輔だけは平然としていた。

「それで主上、州師についてはいかがなるおつもりで？誰が埋めよと仰せになられるのですか？」

陽子は景麒を見上げた。

「…そうだな、今の禁軍三将軍を州師に移動する。」

とたんに場がざわめいた。祥瓊も驚いて陽子の翠の目を見る。強い色が浮かんでいた。

「そうすれば主上のお膝元に降格された官吏がいることになります。昨日の鈴の言つとおり、三将軍は降格されたことを怨み、主上に危害を加えるやも…。」

心もとなげに言つたのは浩瀚だった。これに対して陽子は迷わずうなずいた。

「うん。だから景麒、瑛州侯として、州師に降格された彼らをしつかり見ておけ。」

陽子は下僕に命じた。下僕は迷わずうなずいた。

「もし何か不審な動きがあれば、まず浩瀚に報告せよ。」

浩瀚はいきなり名前を出されて驚きをあらわにして、景麒は首を傾げて陽子を見た。

「浩瀚に、で「」ぞこますか？」

「そうだ。浩瀚には家宰の任についてもひつ。」

言つて陽子は今だ呆然としている浩瀚に目を向ける。

「浩瀚、家宰に任じる。六官をとりまとめるとともに、元王である私を支えてほしい。」

言つて浩瀚の眼を真っ直ぐに見た。

「どうか、よろしく頼む。」

それから桓タイを見る。

「王師の筆頭として、私に力を貸してほしい。よろしく頼む。」

言つて陽子は一人に向かつて深々と頭を下げた。それに浩瀚と桓タイは慌てて礼を返す。ひざまずき、深々と拱手した。

「主上の仰せのまに。」

「こんな私でもよろしいのであれば喜んで…。」

一人はしばらく頭を下げたままだった。

やがて顔を上げた浩瀚と桓タイを、祥瓊は見る。ふと、桓タイと視線が合つた。桓タイはまだ額に汗を浮かべている。緊張しているのだとと思うと、こちらにまでそれが伝わってくるようだつた。

だが、桓タイが禁軍將軍になつたことは、祥瓊にとつてこの上なくつれしいことだつた。だから自然に笑顔になる。桓タイもまた、少し緊張を解いて祥瓊に笑みを見せた。

祥瓊と桓タイはひそかに笑みを交わした。「主上、和州侯についてですが。」

景麒は話を進める。

「うん。和州の州侯はもう決めた。」

陽子は迷いのない聲音で言つて、皆を見渡す。祥瓊らは、そんな陽子を真摯に見る。陽子は一つうなずいて、柴望を見た。

「和州侯に任じる。柴望、お前を信じて和州を与える。和州の民を、幸せにしてあげてくれ。止水郷郷長についても、柴望の選挙（推薦）を許す。」

陽子の意外な言葉に、柴望は目を見開いた。深く息を吸い込んで、

ゆっくりと吐きながら跪礼した。拱手し、深く頭を下げる。

「かしこまりました。」

陽子もまた、柴望に向かつて深く頭を下げた。

「和州を、よろしく頼む。」

「は。」

柴望の決意に満ちた返事を聞いて、祥瓊は思った。

この国は、良い国になる。

陽子は、良い王になるわ。

祥瓊は目を閉じた。

「祥瓊。」

陽子に呼ばれて感傷にひたつていた祥瓊は、慌てて返事をした。

「な、何？」

そんな祥瓊を陽子は不思議そうに見ながらも、今から文を書くから遠甫とともに手伝つてほしいと言つた。

陽子は紙と筆を用意した。

そして房室（部屋）の隅に退けられている椅子を一つ持つてきて、

卓子（机）の上の紙の前に座る。深呼吸をして筆を取つた。

祥瓊はその傍らに立つ。同様に遠甫もそうして、二人は陽子を挟むような格好になつた。

筆を持つ陽子の手は微弱に震えている。蓬萊には筆がないのか、と祥瓊は聞きたかったが、陽子の真剣に紙をにらむ様子を見てやめた。

陽子の筆の持ち方に問題はない。なので筆がないわけではないようだつた。ただ筆を持つ習慣がないのだろうと、祥瓊は推測する。だとしたら蓬萊では、何で文字を書くのだろうと疑問に思つが、今はそれどころではない。

陽子はつたない字でゆるりと何かを書き始めた。

祥瓊が文字の手本を書き示し、遠甫が文字の意味を解説し、陽子はようやくと文を書き終えた。

その書面には、こう書かれていた。

『半獸、海客、山客に関する法を撤廃す。右の者は差別の対象に非^{あい}ず。

三公の太師 乙悦遠甫老松

冢宰 浩瀚

禁軍左軍將軍 青辛桓タイ

和州州侯 柴望

大僕 虎嘯

女史 孫昭祥瓊

奄^{げなん} 女御 大木鈴

蘇蘭桂桂桂

禁軍右軍將軍及び中軍將軍は青桓タイの選挙（推薦）を許す。

和州止水郷郷長は柴望の選挙を許す。

瑛州少学へ入学を許す者 夕暉

最後の一文を読んで、祥瓊は鈴を手招きした。鈴は首を傾げて祥瓊の側に寄る。

「夕暉を、瑛州の少学へ入れてくれるそつよ。」

祥瓊は軽く笑みを浮かべて鈴を見た。すると鈴は大きな目を一一杯開いて、口許に手を当てる。

「夕暉。」

「え？」

鈴に呼ばれて夕暉は口を開けた。

「瑛州の少学へ入つてもいいって。」

鈴がはつきりそう言つと、夕暉は驚いて陽子を見た。陽子は微笑みを浮かべている。そして立ち上がり、言った。

「夕暉、無事に少学を卒業したら、大学を目指してくれるとうれしい。そして、大学を卒業し、朝廷に上がつてることを待つていて。もちろん強要はしないけれど。」

陽子が夕暉に向かつて頭を下げる時、夕暉も感極まつて頭を下げようとした。そのときだった。

「よ、良かつたなあ！夕暉！」

いきなり虎嘯の大声が聞こえて、皆が皆、彼を振り返った。

皆の視線が集中しているにも関わらず、虎嘯は我がことのよう夕暉の処遇を喜んでいる。夕暉の肩をばんばん叩いて、田をつるませていた。

「兄さん、やめてよ、恥ずかしいでしょ！」

夕暉が顔を真っ赤にして虎嘯の手を肩から払おうとする。しかし虎嘯はがっしりと夕暉の肩をつかんだ。

「兄さんはうれしいぞ。良かつたなあ、夕暉。お前の念願がついに叶つたぞ！」

「や、それはうれしいんだけど、兄さんがそこまで喜ぶことないでしそう？子供みたいにはしゃいで、僕が恥ずかしいじやないかつ。夕暉はほとほと困っている。皆がそれを見て笑つた。そんなことはおかまいなしに、虎嘯は涙を流し始めた。それを見て夕暉はぎょっとする。

「兄さん！」

もう一度兄をたしなめて、夕暉は陽子に深く頭を下げた。

「申し訳ありません。こんなみつともないとこをお見せして。」

すると構わない、と陽子は首を振つた。

「夕暉が瑛州の少学に入ることは虎嘯の望みだつたから。「望み……。」

夕暉はつぶやく。依然として肩を叩きながら涙を流す兄を見上げた。陽子はそんな虎嘯を、暖かい目で見る。

「うん。和州の乱での働きに感謝して、これは私から虎嘯へのお礼なんだ。だから、当の夕暉にも喜んでもらえるとうれしいのだけど。駄目かな？」

陽子に問われ、夕暉は慌てて首を何度も横に振つた。

「そんなことないです！うれしいです。ありがとうございます。」

言つて夕暉はがばっと頭を下げた。

「良かったね、夕暉。」

鈴が笑顔で言つと、夕暉は頬を紅潮させて、頭を上げつつうなづい

た。

「本当に、良かつた。」

虎嘸は涙をぬぐいながら言つた。

そんな様子を祥瓊たちは暖かい目で見守つた。
さあ、と陽子は先ほど自分が書いた書面を持ち上げて、満足気に見つめる。

「これで主な官吏は決まった。」

言いながらそれを卓子に置いて、皆に見せる。祥瓊たち皆はその書面を身を屈めて見て、満足そうにうなずいた。

陽子は、改めて卓子の回りを取り囲む人々を見る。景麒を始め、一人一人の顔を見ていった。背筋を伸ばし、言ひ、「みんな、これからよろしくお願ひします。」

陽子は深く頭を下げた。

それを受け、景麒がひざまずく。頭を下げた。それに習つよう^{へいふく}に皆が膝を折つていく。手を床に付き、ひれ伏した。祥瓊もまた、平伏する。

しばしの間、沈黙があり、祥瓊はそつと陽子の顔を見上げた。
するとどうしたことか、陽子は憂い顔だった。

祥瓊と鈴は走廊（回廊）を歩いていた。金波宮の、二人にあてがわれた房室（部屋）へと戻るところだった。

右手には、よく手入れされた美しい園林（庭園）が見える。雀が^{すずめ}高い声で鳴き、燕^{つばめ}がなめらかに滑空する。緑が豊かで、池の水が透き通るようにきれいだった。池に架かる橋は、朱塗りで宙に浮いている。地には春の草花が芽を出し、所々に赤や淡い紅色の花が咲き始めていた。

そしてかすかに聴こえる雲海の波の音と、潮の匂い。

この国は気候の穏やかな国なのだと祥瓊は思つた。彼女の母国では今はまだ春は訪れないらしいだろ。それどころか王を失った国には、これから天災と妖魔の蹂躪^{じゅうりん}が襲つてくるに違いない。

「祥瓊。」

園林を眺めながら歩いていると、並んで歩いている鈴が祥瓊に声をかけた。

「何?」

祥瓊は園林から田をそらして鈴を見る。鈴は何かを考え込んでいる表情だった。

「…どうしたの?」

祥瓊が静かに問うと、鈴は少しうつむいて、歩きながら答えた。

「陽子、なんだか悩んでなかつた?」

祥瓊は、はつとした。鈴も気づいたのだ。先程の、陽子の憂い顔に。それで祥瓊も問い合わせる。

「鈴も、そう思つたのね?」

言つと鈴は祥瓊を見た。

「祥瓊も?」

祥瓊はうなずく。

「ええ、陽子、何かを憂いでいるようだつたわ。」

「何を憂いでいるんだろう?」

祥瓊と鈴は歩きながら首をひねつた。

「あ。」

「ひょつとして。」

鈴と祥瓊は同時に声を発して、お互いの顔を見る。

「平伏されたのが嫌だつた。」

二人は同時に同じ言葉を発して、苦笑する。祥瓊は一つ息をついて言つた。

「なんというか、陽子つて王なのにすぐ気安いよね。」

言つて斜め上を見つづ歩いてると、鈴は肯定する。

「うん。ちつとも偉そうにしていないし、あ、偉そうにしてないのは采王も同じだけど、それでも下官に頭を下げるようなことはなさらなかつたわ。でも陽子は誰にでも頭を下げるでしょ。しかも虎嘯やあたしたちに、名前で呼んでいい、呼んでくれつて言つじ。まる

で身分を知らないみたい。」

「そうなのよね。…蓬莱には身分がないの？」

ふと祥瓊が問うと、鈴は首を傾げてしばらく考え込んだ。やがてゆっくりと口を開く。

「……あたしがあちらにいたときに、あつたと思つんだけど。あ、でも表面上では、なかつたわ。」

「え？」

祥瓊が、よく分からないと書つように鈴の顔を見ると、鈴は苦笑した。

「ええとつまり、国は市民平等だと書つていたけれど、それは表面上のことであつて、実際は平等じゃなかつたつてこと。」

「つまりやっぱり身分があつたといつこと？」

祥瓊の問いかけに、鈴は尙も考え込む。

「ええと、身分が残つてた、て書つたほうが正しいかもしない。」

祥瓊は鈴の言うことがいまいち分からなくて首をひねる。その様子に鈴は困つてしまつたのだろう、少し話題を変えた。

「あのね、祥瓊。あたしがこちらに来たのはずつと昔のことなの。でも陽子はつい最近來たばかりじゃない。だから、その、陽子がいた頃の蓬莱では身分がなかつたのかもしれない、ということ。」

祥瓊は不思議に思つて鈴を見た。では、鈴のいたころの蓬莱では身分があつて、陽子がいたころの蓬莱では身分がなくなつたといつことだらうか。

鈴にそう言つと、彼女はあこまこにうなづく。

「うーん……、簡単に書つと書つことだと思つ。」

「思つ？」

祥瓊の問いに、鈴は困つたよつて苦笑する。「こちらに來たとき、あたしはまだ、十二歳くらいだったから、ほんと書つと身分とか国のこととかよく分からなかつたの。でも、あたしの家は貧しくて、お金持ちの人間に頭を下げて暮らしていだから、やっぱりあの頃身分はあつたんじゃないかなって思うの。でも、陽子の時代では、身分は

なくなつたのかもね。」「そう…。」

祥瓊はやはりよく分からなかつたが、とにかくうなづいた。

「まあ、陽子が身分に頼着しない、といふことは確かよね？」

祥瓊が問うと、鈴はうなづく。

祥瓊は前を見て歩いた。そしてぽつりとこぼす。

「とにかく、陽子は人から叩頭ひつとうされることが、好きではないといふこと。」

「そうね。平伏されるのは嫌なんだと思う。だから拓峰の整理のとき、郷城に籠つたんだわ。」

「でも陽子は王だわ。誰からも平伏されるのは当然のことよ。それを嫌がると、王としての責務を心得ていないので、と思われてもおかしくないわ。国の意義、王の威信がなくなつてしまつ。」

だから恭国の女王、供王は、あどけない風情の少女にも関わらず、偉そうにしていられるのだと祥瓊は思った。王としての責務を心得ていて、それを実行しているから、誰からも頭を下げられる権利がある。

対する自分は公主としての責務を果たしていないにも関わらず、王宮でふんぞり返つていたから、民に憎まれたのだ。

それを鈴に言つてみると、鈴は前を見て歩きながら、再び考え込んだ。

「何か、考えがあるんだと思う。陽子には、国の意義とか王の威信、責務とか、それらとは別にして。」

「それは、いつたい……？」

祥瓊が鈴の顔をのぞきこむよつこすると、鈴は苦笑する。

「分からぬわ。」

言つて鈴は黒い瞳をきらめかせる。

「でも、陽子のことだもの。きつとあたしたちが思つてゐる以上に、自分の立場を考えているんだと思う。」

鈴の瞳は日に照らされて、少しだけ茶み（ちゃみ）をおびていた。

祥瓊は、強くうなづいた。

「そうね。」

それから七日が過ぎた。祥瓊らは金波宮で特に何をするでもなく過ごしていた。

桓タイや虎嘯も暇そうにしている。浩瀚さえも手持ち無沙汰のようだった。

陽子は自室に籠っていた。そんな彼女がいつたい何を考えているのか知る由もなく、祥瓊らは息をひそめるようにして日々を過ごした。

そして翌日。景王陽子は外殿に諸官を集め朝議を開いた。この九日間顔を出さなかつた朝議に、王はやつと出たのであつた。

祥瓊は回廊で一人の官吏が外殿へと向かうのを見かけた。恐らく朝議に参列するのだろう、絹の官服を着用し、髪を頭頂で束ねて、それを止めるための小さな冠を被つている。

よく見るとその人物が桓タイであることに気がつき、祥瓊は彼に声をかけた。

「桓タイ。」

言って、あ、と口に掌てのひらを当てる。そして、振り向いた彼に丁寧に

礼をし、少々上目使いで彼の顔ほおを見上げた。

「失礼致しました。これからは青将軍せいぜい…とお呼びするべきでしょうか?」

祥瓊は恐る恐る言つてみた。

桓タイは王師、禁軍將軍なのだから王の私物の将である。対する祥瓊は女史、最下級の文官であるので、二人の位には雲泥の差があつた。

それで祥瓊は居すまいを正したまま、桓タイの眼を見据えた。すると完全に祥瓊のほうを向いた桓タイは、軽く吹き出すように

してから微笑んで一礼する。

「今まで通りの接し方でお願いする。」

柔らかく言った桓タイに、祥瓊は苦笑した。「いいの?」

「祥瓊は主上に対しては親しいのに、俺に対してはよそよそしくなつてしまふのか?」

少し残念そうに言つ桓タイに、祥瓊は樂後の言葉を思い出した。いや、正確には陽子の。人と人との間には立つていて分の距離しかない。

祥瓊はしつかりと顔を上げた。その紫紺の瞳で、桓タイの優しげな瞳を見る。

「じゃあ、遠慮なく、今まで通りに接するわね。」

「うん。」

笑みを浮かべてうなずいて、桓タイは踵を返す。

「桓タイ。」

祥瓊は再び呼び止めた。ん、と桓タイは再び振り向く。祥瓊は言いたいことがあつたが、彼が急いでいることを悟つて言つのをやめた。もうすぐ朝議が始まる。

「なんだい?」

桓タイは聞いてきたが、祥瓊は静かに首を振った。

「何でもないわ。ごめんなさい、急いでいるのに引き留めてしまつて。」

そう言つた祥瓊に、そうかい、と首を傾げて桓タイは軽い衣擦れを残し、外殿へと向かつていった。祥瓊はその背を見て思う。今日の朝議で、和州の乱で逮捕された三人のことを陽子は諸官に言つのだろうが、同時に桓タイらを朝廷に召し上げることも、正式に言い渡すのだろう。祥瓊は眉をひそめる。

官吏たちが新たな禁軍將軍が半獸だと知れば、桓タイは……。

そこまで考えて祥瓊は大きく首を振る。

いいえ、桓タイは強いわ。たとえ何かがあつたとしても、決して自分に負けたりしない人よ。

祥瓊は、外殿へと向かう背中を、じぱりくの間見つめていた。

「初勅が伏礼を廃す？！」

すつとんきょうな声を上げたのは祥瓊だった。彼女は自分の座つている椅子を倒す勢いで立ち上がる。

「祥瓊、祥瓊。」

落ち着いて、ヒセヤやく鈴に、祥瓊はああ、と言つて改めて椅子に腰を降ろした。

積翠台せきすいだいと呼ばれる建物だった。そこあさまやの四阿風の堂室（部屋）には四角い卓子（机）があつて、景王陽子をはじめとする面々がそろつてそれを囲んで椅子に座つていた。

春の温ぬるい陽射ひのひしが四阿を照らし、堂室のそこここに柱の影を落とす。さわやかな微風そよかぜが吹きつけ、卓子の上に置かれた茶杯ちのみの中の茶をかすかに揺らした。

そんな午後だった。皆が皆、祥瓊の方を向いて彼女は少し赤面する。

「陽子、それ本当に宮に命じたのか？じゃあ俺ら、高官こうかんに対しても平伏しなくていいってことか？」

言つたのは虎嘸とらのぶだった。彼は目を見開いて驚きをあらわにしている。

「うん。」

北を背にして座る陽子は頓着なげにうなずいた。祥瓊は鈴と顔を見合させる。

「あの…。」

おずおずと陽子に声をかけて、夕暉は椅子から立ち上がる。

「それは、もちろん民にも布告した勅令ですよね。だとしたら、僕たち慶の民も、官吏や、台輔、王である貴女にも、叩頭うけいとうしなくてよいということですか？台輔のよつに慶の民すべてが、有位の者にも跪きれい礼だけでよいと？」

この質問に対しても、陽子は頓着なげにうなずいた。

遠甫がおもむろに口を開ける。

「前代未聞の初勅でござりますな。わしは未だかつて、民に向かつて平伏するなどお命じになられた王を、拝見したことがございません。」

非難のように聞こえる遠甫の言葉には、しかしながら感嘆の響きがあつた。

「私も大変驚きましたよ。」

言つて浩瀚は苦笑する。陽子を見て言つた。「朝議で諸官に向かつて、人に礼拝されるのが好きではない、とはつきり仰られたときは、柴望と桓タイとともに唖然と致しました。」

「そんなに変なことかな?」

陽子の問いに、浩瀚はさらに苦笑しながら肯定する。

「こちらでは有位の者には平伏するのは当たり前のことです。さら^に同じく、下位の者は上位の者に平伏する^{ちかひやく}のは当然です。これは天地開闢以来一度も覆されたことはないと存じますよ。」

陽子は首を傾げた。

「しかし私は人に対峙したとき相手の顔が見えないのが嫌なんだ。」

陽子の言葉を聞いて、景麒は彼女にそっと泣きやぐ。

「それは…官吏のことですか?」

陽子は眉をひそめて下僕を見やる。「…それもあるかもしれないな。」

ささやいた陽子に、景麒はわずかに哀れむような表情を見せた。陽子は苦く笑う。
「この話はよそう。お前と私だけの話だ。」
言つて、陽子は景麒に向かつて秘め事をするように、口に人差し指を当てる。

陽子の切実な顔に、景麒は無言で頭を垂れた。

それを見届けて、陽子は茶杯を両手で包む。

「私は位があるとかないとか、身分が上とか下とか、そういうものにどうも違和感を覚える。」

しん、と堂室の中が静まった。全員の視線が陽子に向かう。

「しかも他者に頭を下げるなんて、正直言つて不快だ。」

陽子の断固とした言い様に祥瓊は自らを省みてうなだれた。

「また、他者に頭を下げるたびに壊れていくことも問題だと思つ。」

祥瓊と同じように、隣に座つている鈴がうなだれた。

「私は、慶の民の誰もに王になつてもらいたいんだ。」

その陽子の明瞭な言葉に、祥瓊と鈴は顔を上げた。そして陽子の深い翠の瞳に見入る。

「挨拶を交わすとき、人に感謝するとき、詫びるとき、私たちは自然と頭が下がるものだ。誰に強制されるものでもない。違うだろうか、浩瀚？」

声をかけられて浩瀚は少ししうどになりつつも、その通りだと答えた。

「確かに主上の仰る通りです。人は常に誰かに為人を見られています。自分と人と相対するとき、相手の顔が見えずして話はできませんね。確かにそういう考え方もあるのだと、私は初めて知りました。」

淡々とした言い様だったが、浩瀚は恥じ入ったように目を閉じた。

陽子は皆に視線を移す。

「伏礼を廃す、と私は言つたがだからといって無礼を奨励しようと云ふわけじゃない。そもそも礼というものはするもしないも本人の品性の問題だ。」

浩瀚をはじめ、これには全員が納得したようになはずいた。陽子は言葉を続ける。

「他者に頭を下げさせて、または他者に頭下げ続けて、やがて壊れていつた人を皆は見たはずだ。私は慶の民にこれ以上そんなふうになつてほしくない。ありがたいときには頭下げ、嫌なことには毅然と頭を上げて対抗する。そんなふうに、慶の民には誰もが王になつてほしい。己を治める、唯一無二の君主に。人は誰の奴隸でもない。そんなことのために生まれるのじゃないのだから。」

祥瓊は陽子の真摯な翠の瞳を見続けた。

「そのためにはまず、相手に対して毅然と頭を上げることから始めて

ほしい。」

かたん、と音がした。誰かが椅子を引いて立ち上がる。それを合図に皆が立ち上がった。祥瓊は紫紺の瞳で、陽子の翠の瞳をしつかりと見据える。

陽子も椅子を引いて立ち上がった。そうして改めて皆の顔を一人ずつ見る。深く、頭を下げる。

「改めて言つ。みんな、これからよろしくお願ひします。」

それは決意に満ちた声音だつた。

祥瓊ら皆は今度は床に手を付かなかつた。陽子に対して、立つたまま深く頭を下げた。景麒さえもひざまずかずに礼をした。

慶国首都堯天。街には露店があふれ、喧騒が響く。徐々に近づいてくる春の気配に、民は少々浮かれ氣味であった。

この街の門前に、鈴は立っていた。

門では人々が行き来している。堯天の街に入る者、街から出でいく者。

鈴は堯天の街から出でていこうとしていた。彼女は街並みを見渡すように立っている。その姿は質素な袍^{はう}で、荷物の入った風呂敷包みをたすき掛けのようにして背負っている。隣には彼女の騎獸^{きじゆう}である三駄^{さんたい}がいて、その背には才國まで旅ができるだけの荷が乗っていた。

祥瓊はそんな彼女をまぶしげに見た。虎嘯が大きな体躯をそらすようにして、にっと笑う。

「気を付けて行けよ。そんでもって早くここに帰つて来いよな。」まぶしそうに笑つて、虎嘯は言った。鈴は瞳をきらめかせて笑みを浮かべ、うなずく。そして陽子を見て言った。

「本当にありがとう、陽子。才國まで往復できるだけの路銀^{ろぎん}をくれて。」

「構わない。乱で助けてもらつたからそのお礼として受け取ってくれ。」

言つて、陽子は笑う。「そのかわり、帰つてきた女御^{めいご}としてたくさん働いてもらひながら。」

「そうね、うん。」

陽子の言葉に鈴は笑つた。

そこへ夕暉が鈴の前に出る。

「僕は鈴が帰つてくる頃には少学に行つてるから、ここでお別れみたいになるんだけど、旅の無事を祈つてるからね。」

言つて、夕暉は鈴の手を握つた。

「ありがとう、夕暉。あなたも、勉強がんばってね。」

鈴が言うと、夕暉は少し涙を浮かべてうなずいた。その様子を見て虎嘸が茶化す。

「なんだ？夕暉。永遠の別れじゃねえんだから。」

「うん。そりなんだけど、ごめん。」

謝る夕暉の手を、鈴は強く握つて軽く振つた。

「ありがとう、夕暉。」夕暉はうなずいて、ゆっくりと鈴から離れた。

鈴は祥瓊を見る。祥瓊は鈴に笑つて見せた。

「無事に帰つてきてね。貴女やわたしがいないと陽子がすぐ困るんだから。」

すると陽子は唇を尖らせる。

「なんだそれは。」

「あら、だつてわたしがいなくちや陽子は読み書きもできないじゃない。」

祥瓊が陽子をからかうと鈴もそれに乗つてくる。

「そうよね。あたしがいない間とんでもない格好で、朝議に出られちゃ困るわ。」

「そこはわたしがきちんと見張つておくから。でもわたしも鈴が旅立つてすぐに雁国に行つて、楽俊に会いに行かないといけないから、その間心配よね。なんてつたつて陽子のことだもの。」

「そうかもね。陽子つたら正直すぎて大丈夫なのかな、なんて思うときあるもの。」

「そうなのよね。わたしたちがいない間本当に大丈夫かしら、心配だわ。だからお互いなるべく早く帰つて来なくちや。」

「そうね。」「ね。」

自分について言いたい放題の友人一人を陽子はにらみつけた。

「そこまで心配してくれなくても結構だ。」

憮然として言う陽子を見て、祥瓊と鈴はくすくすと笑う。

「でもほんと、陽子には感謝してる。」

鈴が陽子に真剣に言うと、祥瓊もうなづく。すると陽子は首を傾げた。

「別に特に感謝しても『うようう』とはしてないつもりだが……」
言つて、鈴に笑つた。「とにかく、無事に帰つてきてくれ。待つて
るから。」

「うん。」

鈴は大きくうなづいた。

鈴は三駄の手綱を取つて踵を返す。きびすこちらに向かつてひとつ手を

振つて門をぐぐり、堯天から出立した。

街から出していく鈴の後ろ姿を、祥瓊、陽子、虎嘸、夕暉の四人は
いつまでも見送つた。

それから数カ月が経ち、鈴は無事に才国から帰つてきた。祥瓊は
鈴より先に雁国から帰つており、楽俊のことを陽子に話した。樂
俊は陽子が元気にしていると聞いて安心していた。そして鈴が帰つ
たと知らせを受けたとき、祥瓊は彼女の旅立ちのときと同じように
彼女を門前で迎えて、一緒に金波宮へと入つた。

鈴は語る。采王さくおうも采麟さくりんも、鈴を暖かく迎えてくれたと。そして、
以前会つたときとはずいぶん変わつたと言つてくれたと。

「私と搖籃よわいんの言つたことを、鈴は理解してくれたようね。」

そう言つて、采王は笑つてくれたらしい。ちなみに搖籃というのは
采麟さくりんの字である。

「これからは景王の側にいてあげてね。」

搖籃は柔らかく言つた。そして、采王は鈴が慶国に着いたら、才國
にある鈴の戸籍を離籍し、仙籍を削除すると約束してくれた。これ
で鈴は慶国民となり、慶の仙籍に入れる。それで鈴はすぐに陽子に
より戸籍を用意され、慶の仙に叙された。晴れて彼女は、正式に慶
の官吏になつたのだつた。

「祥瓊にはまだ行くところがあつたね。」

鈴は微笑んで祥瓊を見た。

金波宮の園林（庭園）で、池の縁に腰を降ろして一人は語り合っていた。

夕暮れ時、池は夕陽を映しきらきらと輝いている。周りの緑も夕陽に照らされ薄い朱色に染められていた。

鈴は金波宮に帰つてくるなり陽子の堂室（部屋）を訪れ、祥瓊を助けられないか相談してくれた。すると陽子はそれに応じてくれた。それ以来陽子は、政務の合間に祥瓊の減刑について考えてくれている。

「鈴にも陽子にも、そして桓タイにもすく感謝するわ。」

祥瓊は池に映る夕陽を見ながら、静かに言つた。夕陽の影は穏やかに揺らめいている。

そこへ後ろから足音が聞こえてきて祥瓊と鈴は振り替えた。夕陽に照らされた桓タイが庭に降りてきた。柔らかな微笑みを浮かべて祥瓊を見る。

「主上が執務の房室（部屋）へ来てくれとおっしゃつていて。」

言つて、鈴に目を向けた。

「長旅お疲れさん。鈴も祥瓊と一緒に来てくれ。主上がお呼びだ。」

祥瓊と鈴は視線を交わした。

祥瓊は笑みを消して桓タイを見上げる。

「わたしのことね。」

「うん。さあ、行こう。」

桓タイに促されて、祥瓊と鈴は彼の後を追つた。

王の居所となる正寝せいしんへと桓タイは歩いていく。その後を祥瓊と鈴が付いていき、やがて彼らは王の執務の間へとたどり着いた。

「失礼致します。祥瓊と鈴を連れて参りました。」

桓タイが扉に向かつて声をかけ、陽子の返事が中から聞こえると祥瓊たちは房室へ入つた。

中には執務の書卓（机）の前に立つ陽子と景麒、そして遠甫と浩瀚が立っていた。

祥瓊と鈴は彼らに向かつて跪拝する。立ってくれという陽子の言葉に二人は立ち上がり、桓タイとともに陽子に歩み寄った。

「陽子。」

祥瓊は声をかけた。陽子はうなずく。

「桓タイから事情は聞いたし、鈴からもお願いがあった。私としても祥瓊には堯天にしてほしい。この金波宮に。」

言つて、陽子は軽く笑う。

「それに祥瓊がいなければ私は読み書きもできない王になるんだぞ。遠甫がいてくれるけれど、まさか太師が私の執務まで面倒を見ててくれるわけにはいかない。私の側に付いて執務を手助けしてくれる官吏は祥瓊しかいない。そう、あなたしか女史はいないんだ。」

陽子はそう力説した。「私は前にも言ったよね。この王宮で信用の置ける人が一人でも多く必要なんだと。私の周りのほとんどの官吏は私を信用しない。私は女で、胎果たいがで、こちらのことを知らない。だから信用しない。そんな中、乱で得た仲間たちだけが私の信の置ける人たちであり、私を信じてくれる人たちだ。」

言つて、陽子は碎顔する。

「特に祥瓊と鈴は私の友達だ。」

祥瓊はなんとなく身動きが取れず、じつと黙つて陽子の言葉を聞いていた。

すると浩瀚が陽子に話しかける。

「主上、こちらでは身分を越えて友になつたりはしないものですが？」

浩瀚が淡々と言つと、陽子は分かつてゐるといつぱりうなずいた。「けれど、私にとつて祥瓊と鈴は友達だ。そう思つて一人に接してはいけないか？」

陽子が聞くと、浩瀚はゆっくりと首を振つて微笑む。

「いけないということはございません。主上は大変仲間想いの方で

あらせられる。」

浩瀚は言つて、祥瓊に視線を移す。

「和州の乱での働きを、柴望と桓タイから聞いている。なんでも私の存在に気づいたそうだな。」

言つて笑つた浩瀚は、陽子に向き直つた。

「主上、私からもお願ひします。祥瓊はこの先、慶にとつて欠かせない官吏となるでしょう。それを一生を牢の中で過ごせるのは大変忍びない。」

言つて、再び祥瓊の目を見る。

「私は主上を信じていた。偽王さきおうが起つてから、州侯を罷免されても信じ続けた。明郭めいこうにて桓タイたちを集め、柴望を遣わし、和州に過ちありと主に伝えようとした。」

言つて、わずかに苦笑する。

「そのとき柴望以下、桓タイたちは主上を信じていなかつたようだが。」

その言葉に、祥瓊はちらりと桓タイを見た。桓タイはわずかに苦笑して下を向いている。浩瀚に向き直つた祥瓊の瞳を彼は見つめた。

「だが、芳国からの客人、いや、元公主じゅんこうしゆは主上を純心に信じてくれた。」

「冢宰さきやう…。」

祥瓊は浩瀚を見上げてつぶやいた。浩瀚は笑む。

「お前はこれからも主上を信じて、お仕えしていきたいのではないが、と私は思うのだが。違うだろうか？」

祥瓊は紫紺しづくの瞳をまっすぐに浩瀚へと向けた。

「いいえ。いいえ、わたしは主上、陽子の女史を務めていきたいです。鈴や桓タイたちともこのまま別れたくはありません。わたしのしたことは確かに罪に値します。だから罰は受けなくてはなりません。けれど、もし、冢宰や台輔、太師、そして主上…陽子がわたしになにがしかの力を貸しくださいますのなら、罰を軽く、いえ、減刑を望みたいのです。」

祥瓊は訴えた。すると皆が祥瓊に向かってうなずいた。

「主上。」

景麒が陽子に話しかけた。

「祥瓊を、不間に處すよつ供王にお願いする」とはできませんでしょつか？」

「台輔。」

祥瓊は目を見開いて景麒を見た。彼は陽子を凝視している。陽子は景麒を見上げて、そして考えこむようにうつむいた。

「不間に處してもらうのか…。そんなことが可能なのだろうか？」

難しい顔をして陽子は遠甫に問いかけた。遠甫もまた、眉間にしわを寄せて考え込む。

「それは無理でしような。罪人を裁くはその国の秋官、ひいては王でござります。他国がそれに介入してはなりません。」

遠甫の言葉に景麒はため息をつき、陽子はうなだれた。

「では減刑をお願いすることはできませんか？」

言ったのは傍らに立つ桓タイだった。桓タイは言つ。

「主上の親書を供王へと送るのです。無論慶は恭国とは何の誼も持つてはおりませんが、お受け取りになり、読んでくださいることは確かです。」

「そうか、親書か。どうだらう、浩瀚、遠甫？」

陽子は一人に問うた。「確かに供王は親書は読んだべきださりますでしょうが、内容に関しては…。」

浩瀚は口をつぐんで問うよつに遠甫を見る。「どうお受けかとめになられるか分かりませんな。場合によつてはお怒りを買うことになるやもしれませぬ。」

遠甫は息を吐きながら言つた。

桓タイは食い下がつた。

「けれど、主上直々の書簡でござります。もし供王がお怒りになつたとしても、祥瓊がどれだけ主上に信頼されているかお分かりくださいますでしょうし、祥瓊が乱に加担し、平定に一役買つたとお知

りになれば、いえ、祥瓊はもう公主時代の祥瓊とは違うのだ、考えを改めたのだとお分かり下されば、供王は祥瓊の処分について充分にお考へ下さるのでは？」

切羽詰まつた響きで言つて、桓タイは軽く息をつく。

そのとき鈴が声を上げた。

「そうです。祥瓊は公主だったときに、父をお諫めできなかつたことを悔やみ、反省しています。」

言つて、鈴は軽く胸の前で手を合わせた。

「あたしは一度陽子を恨みました。あたしの大切な小さな友人を昇紳に殺されて、そんな官吏をのさぼらせておく景王を許せないと思つたんです。でもその誤解を、祥瓊が解いてくれました。景王は知らないだけだつて。王が知らないじや許されないとあたしが言うと、祥瓊は自分も公主のことを知らなかつたから父と母が討たれた、公主としてちゃんと父を諫めていれば、そんなことにはならなかつたのについて後悔していました。あたしはそれで、もっと景王に会いたいと思つたんです。」

鈴はちらりと陽子に微笑みを見せてから、祥瓊を見る。

「祥瓊は、あたしの大事な友達です。」

漆黒の大きな瞳が、祥瓊をひたと見る。

秋の風はさわさわと吹く。祥瓊は緑の絨毯に全身を預けて仰向いていた。眼には青い空が写り、所々に雲がまるで河のように流れているのが見てとれる。頭上には樹木がほんの少し風にあおられ葉を揺らしながら立っている。

そして、隣には依然として桓タイの、巨熊の姿が静かに横たわってかすかな寝息を立てていた。

祥瓊は、あたしの大事な友達です。耳に、あのときの鈴の声が蘇つた。目には鈴の漆黒の瞳が。かすかに揺れていて、けれど

も力強さを持つた黒い瞳が。

その瞳を祥瓈は一生忘れないだらう。

鈴も陽子も桓タイも、それに台輔や冢宰までもが自分を信じてくれた。

祥瓈は恭国へ旅立つこととなつた。もしかしたら一度と帰つてこられないかもしない旅である。

だがその前に桓タイが隨行の者数人を連れて、芳国へ旅立つた。
非公式に芳國首都蒲蘇、鷹隼宮を訪れ、景王の親書と祥瓈から月渓へ宛てた書簡の、二つの書状を月渓に渡すために。

祥瓈は桓タイが旅立つた後、それを追うよつに慶を後にした。
和州の乱から一年、季節は巡り冬が過ぎ、春が来ようとしているときだつた。

わたしはどうなるのかしら。

旅の途中何度か思った。でも覚悟はできている。

それに、景王 陽子が供王に宛てて祥瓈の減刑を願う親書を書いてくれて、別の使者がそれを届けに恭国へ向かつてゐる。歩いて旅をする祥瓈は彼らには追い付けない。

慶まで旅をしてきた道を、再び祥瓈は歩いていく。今度は逆方向ではあるが、なんとなく懐かしく感じた。

祥瓊は高岫（国境）を越えて柳国へ入った。その国は前に来たときとは違う様相を呈していた。

荒れているのだ。

柳は傾いている。そう、以前一緒に旅をした半獸は言っていた。あのときはまだ、目に見えて荒廃が分かる程度ではなかつた。今も特に何の問題もないかのように見えたが、何かが違うと感じる。この街の様子。以前とは違つのが分かつた。隔壁は傾き、石畳はばらばらである。人の姿は極端に少ない。柳では民は地下に暮らすと前の旅で知つたが、それにしても少なすぎるのではないかと思う。

祥瓊は愕然（がくぜん）とした。そしてたつた今通つてきた高岫の門を振り返る。門の向こうには整然とした石畳が伸びていた。これが、主上の格の違いというもの？

門の向こうの国の王朝は五百年続く大王朝。対する祥瓊が今立っている國を治める劉王朝は、じわじわと沈んでいこうとしている。唐突に震えが立ち上ってきた。

祥瓊の母國、芳は三十年余りで王を失つた。それよりも四倍近く長く王がいた柳は、そもそも芳より豊かだつた。それが今はこの状態である。ならば芳はそれよりもっと荒れてしまつのではないか。

祥瓊は息をはいて脱力した。

しばらくその國土を見つめ続けて、祥瓊はやつと一步を踏み出す。柳国首都芝草へ向けて歩き出した。

芝草は賑（にぎ）やかだつた。白い石の壁に墨色（すみいろ）の屋根が建ち並ぶ。白と黒を基調とした王都は、大変美しい。北に聳え立つ凌雲山（りょううんざん）、芝草山（しばくささん）もまた白く、その頂（いた）には森のような王宮が見えた。人々が賑やかなのは都だからということもあるだろうが、浮かれるようにし

て笑っているのがどうもおかしい。民たちは何かをあきらめたように笑っているのだ。そしてその笑みに、祥瓊は暗い影を見ていたためない気持ちになる。

祥瓊は安い宿を探して歩いていた。陽子からもらった路銀は片道分だけで、しかも最低限だつた。もつと持つていけと言つ陽子に断固としてこれ以上は受け取れまいと断つた。慶は貧しいのだし、罪人のために多くの金はいらない。祥瓊は街の南の方に安そうな宿を見つけて入つた。入つてすぐそこは飯堂（食堂）、まず食事を済ませて店員の案内で宿泊房室（部屋）へ向かう。示されたその房室に荷物を置いて出てこいつとする店員を、祥瓊は引き留めた。店員は怪訝^{けげん}そうに振り返る。

「あの…、どうですか？この国はどんなところ？わたしは旅をしているんです。」

祥瓊はさりげなく柳がどのくらい傾いているか、店員に尋ねた。彼は少し眉をひそめて言う。

「…近頃妖魔が増えたな。戴国から流れきっているんだろうが。」祥瓊も眉をひそめる。「戴から？それは、戴に出る妖魔がこの国の沿岸部にも来ているということ？」

「大方そういうことだろう。北部に住む市民がときどきこっちに逃げてくるからな。」

言つて、三十代後半ぐらいの店員は溜め息をつく。祥瓊は内心思う。それは戴の妖魔ではない。柳の沿岸に出る妖魔である。

「そのことはこの都の人達みんなが知つていることなの？」祥瓊が問うと、店員は顔をしかめた。

「みんなというわけじゃないが、ほとんどの連中が知つてるんじゃないのか？」

「そう…。」

祥瓊は視線を落とす。柳国は確實に傾いている。都の人間が妖魔が出来ることを知つていてるぐらいだから、國府の官吏が腐敗していることは確實だろう。

店員の視線を感じて祥瓈は顔を上げた。彼は苦笑して言う。

「あんた見たとこなかなかの別嬪さんだが一人で旅をしてるのかい？なんならできるだけ早くこの国から出たほうが良くはないかい？」
店員の言葉に祥瓈は目を見開いた。彼は自分の住む国が沈んでいくうとしているのを知っている。

「あなた……」

その先は声にならなかつた。祥瓈が目を見張つているうちに、店員はもう一度苦笑して房室から出ていった。

祥瓈は店員の姿を見送つて、振り返る。狭い房室を見回した。臥牀（寝台）はない。隅に布団が積んであつたのでそれを使うのだ。
祥瓈は窓に寄る。この房室は三階にあるので、柳の國土がよく見える。窓辺に頬杖をついて、祥瓈は思う。

芳も、こんなふうに沈んでいくのだろうか。天災が起こり、妖魔が出没する。それは民を苦しめやがて死なせる。芳の民はやつと先の峯王による過酷な刑罰から解放されて救われたというのに、息つく暇もなく次は妖魔に怯える日々を送らなくてはならないのだ。

「ごめんなさい。

祥瓈は、母國の民にそつと謝る。
目を閉じた。

翌朝、祥瓈は宿で食事をすませてさつさと出てここうとした。ゆっくりする暇などない旅なのだから芝草からも今日中に出るつもりだ。

勘定を払つて宿の入り口から出たところ、声をかけられた。

「どこへ行くつもりだい？」

声の主は昨日の店員だった。彼は水瓶みずがめを持って立っていた。祥瓈は素直に答える。

「恭国へ。」

言つと、彼は少し目を見開いて肩をすくめる。

「そうか。あそこは豊かで安定した国だな。そこなら安全だ。まあ、

道中気を付けてな。

「ありがとう。」

祥瓊が礼を言うと、店員は無言で水瓶を抱えて宿に戻つていった。祥瓊は何かを言いたかったが、何を言つこともできず、芝草の門へと向かつた。

緩やかな街道が続く。桓タイは今頃芳に着いただろうか。祥瓊の書簡を月渓は読んでくれるだろうか。恭国へ向かつた使者はどうしているだろう。祥瓊はいろいろと考えながら街道をひたすら歩いていた。

もうすぐ次の街が見えるころだらうと空を見上げると、青空の中に黒い点を見つけた。それは徐々に大きくなつてこちらに向かってくる。

ああ、騎獣なんだわ。

祥瓊が思つてゐるうちにそれがみるみる形をあらわにした。それは吉量きじょうだった。美しい赤い鬣たてがみを持つ馬のような生き物である。その背に、見覚えのある人物が騎乗してゐるのが見えて、祥瓊は驚く。

桓タイ！

祥瓊は立ち止まつた。吉量操る桓タイがこぢりへゆらりと向かつてくる。

「祥瓊！」

彼は声を張り上げた。祥瓊は硬直してゐた。なぜ、桓タイが？なぜこんなところで彼と逢つてしまふのか？

身動きがとれない祥瓊の目の前で、吉量は街道にふわりと降りた。

「祥瓊、良かつた。合流できた。」

言つて、桓タイは吉量からひらりと降りる。祥瓊に満面の笑みを向けた。祥瓊は桓タイの屈託くったくのない笑顔を見つづ、呆然とする。言葉もない祥瓊に、桓タイはやんわりと笑んで言つた。

「探していた。俺の用事は終わつて、祥瓊はもう恭国へ行かなくて

もいいよくなつたんだ。」

祥瓊は桓タイの言葉の意味を理解できなかつた。なぜ、恭国へ行かなくても良いのだろう。頭の中は混乱して、ただただ桓タイの笑顔を見つめるしかなかつた。

そんな祥瓊の背を桓タイは軽く押す。街道を逆戻りして歩き出した。

坂道をさかのぼつて峠を越えると、素晴らしい景色が祥瓊の目に飛び込んできた。眼下に見えるのは芝草の街、白いそれは湖に美しい影を映している。

桓タイはその場に騎獣を休ませ、自分もその隣に腰を下ろす。そうして隣に突つ立つている祥瓊を見上げて言った。

「座つたらどうだ？」

祥瓊はゆづりりと桓タイを見る。彼は自分の隣を示していた。それで祥瓊は示されるまま彼の隣にゆづくりと腰を下ろした。

一人はしばらく無言で芝草を見下ろしていた。少し冷たい春の風が一人を取り巻く。祥瓊は風にあおられた髪を背中にまわす。それを見て桓タイは言った。

「…少しさ落ち着いたかい？」

彼の顔を見ると非常に祥瓊に気を使つてゐるのが分かつた。桓タイは眉尻を下げて言う。「すまんな。旅の途中で急に俺と遭遇したんで驚いたろう？」

「…いいえ、でも、どうして？」

やつと祥瓊は声を出すことができた。頭はまだ混乱している。

すると桓タイが祥瓊の肩に手を置いて、囁んで含めるように言った。

「祥瓊、よく聞いてくれ。」

祥瓊はうなずく。

「祥瓊の罰は、恭国からの国外追放、以後一切恭国へ入つてはならない。もし国内にあるを発見されれば委細がまわづ叩き出す、だそ

うだ。」

祥瓊は目を見開いた。鼓動が速まるのが分かる。

「それは……。」「

呆然とした祥瓊に、桓タイはやんわりと笑む。顔を覗きこんだ。
「祥瓊は許されたんだ。」

「うそでしょ?」

「うそじやない。供王は祥瓊に、陳謝には及ばず、と言つてください
つたんだ。どこへ行つたつて構わないよ。」

桓タイの言葉に、祥瓊は目を瞬かせる。

「わたし、わたしは……。」「

震える声で言つて、祥瓊は肩に乗せられた桓タイの手にそっと触れ
る。

「このまま、慶へ帰つてもいいところ」と?』

「そうだ。」

桓タイは切ない笑顔で強くうなずいた。

祥瓊は安堵かそれとも驚愕でか、全身から力が抜けていくのを感じた。そのままおれこむようにして、桓タイの胸に頭を預ける。桓タイは祥瓊の背をなでた。

「恵侯が……いや、月渓どのが仰つていた。祥瓊さまの旅は無為になるから、と。」

祥瓊は顔を上げて桓タイの瞳を見た。

「月渓が?」

「うん。月渓どのは祥瓊のことを大変気にかけていらしたよ。お前の書簡を読んで、供王に親書を送つて下さった。祥瓊の減刑を望む

親書をな。」

祥瓊は信じられなかつた。自分がかつて、篡奪者さんだつしゃと罵つた男。その彼が祥瓊を恨むどころか気にかけるなんて。その上自分の減刑を望んでくれたなんて。そんな祥瓊の気持ちを汲み取つたように、桓タイは微笑んで、懐から一通の書状を取り出した。

「月渓どのから祥瓊に、と。」「

言つて、桓タイは祥瓊にその書簡を渡す。

手の中にある書簡を、祥瓊はしばらくの間見つめ続けた。そして、ゆっくりとそれを開く。

その書簡には、月渓の想いが素直につづられていた。

祥瓊さまのご自身の立場をご理解くだされ、それにより深く反省なされたことを、貴方の書簡により存じ奉り大変うれしく思う。以前にも申したように、四年前、貴方の父君ちちのみを討つたことを後悔はない。しかし私は主上を敬愛していた。討つたことを辛く感じ、主上に対しても罪悪感のようなものを持った。だから私は惠州侯のままでいたが、貴方の供王の前に出る勇気に感嘆し、自分もまた、新たなる峯王の前に出る決意をいたした次第である。「月渓は、まだ玉座に就いていなかつたのか？」

心底驚く祥瓊に、桓タイは少し苦笑した。

「うん。最初に対面したときは困惑したよ。月渓どのは自分は惠州侯に過ぎないと仰つて、なかなか書状をお受け取りにならなかつた。玉座を簫奪することだけはできないと仰つて。だが話をするうちにお心を変えられたらしく、玉座につくことを」決意なされた。」

祥瓊は桓タイを見て、再び月渓の手紙を読む。最後の一文を読んで、胸にせまりくる思いがした。

貴方の父上の物を盗む。どうか許して頂きたい。

思わず祥瓊はその書簡を胸に抱いた。

許すも何も、峯王はもういないのに。父はとうべく玉座を手放したのに。

涙があふれた。それは止めようもなく次から次へとあふれてくる。

桓タイが優しく背をなでてくれた。

嗚咽おえつをこらえながら祥瓊は言つ。「月渓は、お父様を好きだったのね。」

言つて、一つ肩を震わす。

「お父様を大事に思つてくれたから、あえて大逆たいぎやくに踏み込み、これ以上民を苦しめるようなことをさせなかつたのね。」

桓タイはただ祥瓊の背をなでてゐる。祥瓊は、芳国へ、自分の故郷へ想いを馳せる。ありがとう、月溪。そして、ごめんなさい。

祥瓊は、桓タイにすがつて泣き崩れた。

ひとしきり泣いて、祥瓊は桓タイから身を引く。袖で涙をぬぐつて桓タイを見上げた。「もう…、大丈夫。ごめんなさい。」謝る祥瓊に桓タイは切なそうに微笑む。

「何がだい？」

それに微笑んで祥瓊は前を向いた。

眼下には芝草の白い街が見える。綺麗な街である。しかし。

「この国は、傾いている…、て。」

ぽつりとこぼした祥瓊に、桓タイはうなずいた。祥瓊は彼を見る。

「知つてた？」

「うん。……恭国に近い辺境の盧^{むら}で、民が官吏の施政について不満を口にしているのを聞いた。県正^{けんせい}の愚痴おとこだつたが、ひどい言い様だつたな。」

県正、と聞いて祥瓊はあることを思い出す。桓タイの瞳を見据えて言った。

「わたし、賄賂^{わいろ}を求められてそれに応じたの。」

いきなり突拍子もないことを聞かされて、桓タイは首を傾げる。

「賄賂？」

「ええ。この柳国で。盗んだ供王の御物^{ぎよぶつ}を県正に差し上げてしまつたの。」

言つて、祥瓊は苦く笑う。

「おかげで恭国に連行されずに済んで、慶まで来られたんだけど。……あきれるでしょ？」

「あきれるな。」

桓タイの即答に祥瓊は目を伏せる。そつすることで罪が消えるわけでもないのに。すると桓タイは彼にしては珍しく淡々（たんたん）とした口調で一言発した。

「その県正にあきれる。」

言つて祥瓊を見る桓タイを、祥瓊も見返した。桓タイは言つ。

「祥瓊の罪はもう済んだことだ。だがこの国はもうそこまで腐敗しているんだな。」

言つて、桓タイは芝草の街を見た。

祥瓊は息を吐く。

「芳も、そんなふうに傾いていくのね。すると桓タイは祥瓊を見て、苦笑する。

「それはないだろう。」

「でも……。」

「月渓どのがおられるだろ?」

桓タイの問いに、祥瓊は目を見開いた。

「あ……。」

そうだ。月渓が玉座にいるかぎり、ひどく荒廃することはない。彼が王である限り國を挙げて、民を荒廃から守ってくれるに違いない。祥瓊の考えを見透かしてか、桓タイは力強く言つた。

「だから芳は大丈夫だ。」

祥瓊は大きくうなづいた。

さて、と桓タイは立ち上がる。同様に騎獸を立たせた。

「そろそろ行こうか。」

祥瓊は首を傾げて立ち上がった桓タイを見上げた。

「行くつてどこへ?」

言うと、突然桓タイは笑いだした。

「え、何?わたし、何かおかしなこと言つたかしら?」

祥瓊が問うと、彼はさらに笑いだす。

「桓タイ……?」

「いや、悪い。」

言つて、桓タイは笑いを無理矢理ひつこめる。笑顔で言つた。

「行くところなんて、一つしかないだろ?帰るんだよ、俺たちは。」

「

祥瓊が尚もぽかんとしていると、桓タイはいつもやんわりとした笑みを浮かべる。

「慶へ帰るんだ。」

「あ、そうか、そうよね。」

言つて、祥瓈は薄く赤面して慌てて立ち上がる。

それを見て桓タイが吉量^{きつじょう}にひらりとまたがつた。そして祥瓈に向けて手を差しのべる。

祥瓈はその手を握ろうとして、すんでのところで動きを止めた。

「祥瓈？」

思い出した。桓タイと初めて出会つたときのことを。

刑吏^{けいり}に石を投げ、追われ、陽子に助けられたが、それでも兵士は追つてきて……。

もうだめかもしねないと思つたとき、差しのべられた手があつた。隔壁^{かくへき}の上から、「おい。」と声をかけられ、見上げると若い男が手を差しのべていた。

それが、桓タイだつた。

祥瓈はその手を握つた。やわらかくも力強い手だつた。その桓タイの手に、あのとき救われた。

そして今も……。

祥瓈は目を見張つて桓タイの手を見る。

わたしはこの手に救われた。

また、涙が流れた。わたしは多くの人に助けられて、今を生きている。

「祥瓈。」

静かに桓タイは祥瓈を呼ぶ。祥瓈は彼を見た。

「桓タイ。」

涙を流したまま見た桓タイの笑顔は、涙のせいで少々ゆがんで見えたけれど、確かに、そう、確かに祥瓈に向けられたもので、やさしかつた。

祥瓈は桓タイの手を握つた。強く、この絆が、この縁が切れない

ように。握り返してくれた手もまた強かつた。

祥瓊は笑みを浮かべて桓タイを見つめる。桓タイもまた笑みを浮かべて祥瓊を見つめた。

わたしは、生きていく。

この、半獸の友とともに。

祥瓊と桓タイを乗せた吉量は、慶国へ向かって優雅に空を走った。

慶国首都堯天、金波宮。

秋の風が吹く。内宮にある禁軍將軍の官邸にはその主たる巨熊の半獸と、紺青の髪を持つ娘が、庭院（中庭）で昼寝していた。

祥瓊はいつのまにか少しの間眠ついたらしく、慌てて起き上がり隣を見た。だがそこには巨熊の姿がなかった。彼女は驚いて立ち上がる。

すると低く太い声がした。

「目が覚めたかい？」

祥瓊が声のしたほうを見ると、庭院に面した堂室（部屋）に巨熊はいた。

「桓タイ…。」

言つて、堂室に上^{あが}る。大きな体躯^{たいにく}を見上げた。熊は後ろ足で立て祥瓊を見下ろしてきた。そして笑つた。　ように見えた。

「家主の承諾なしに勝手に人の家に上がつて、その上家主の寝ているところをじーっと見つめるのはどうかと思つぞ？」

言つて、熊は太い声で笑う。

祥瓊は桓タイの言葉の意味を一瞬とりかねたが、すぐに意味を悟つて頭に血が昇つた。

「えつ、し、知つていたの？わたし^が貴方の官邸に入つてきたのも、あ、貴方の隣で横になつていたのも？」

祥瓊は硬直した。なんということだ。無礼にも程がある。しかしもう遅いし自業自得だつた。桓タイの下官が、入つて良いと言つたので入つた。その庭院に桓タイが獸形で昼寝していた。それをよいことに桓タイの隣で横になつて物思いにふけつていた。

「…ずっと、桓タイ、眠つっていたと思っていたのに。」

祥瓊がさらに赤面して舌をもつれさせると、巨熊の姿の桓タイはじつとその眼を祥瓊に向けた。

「禁軍將軍をなめてもらつては困るな。」

祥瓊ははつとする。そう、桓タイは軍人である。眠つていっても少しの物音で起きることができた。

祥瓊は勢いよく頭を下げる。

「失礼致しました！」

叫ぶように言うと、桓タイは太い声で笑つた。

「まあいいさ。それにしても俺は下官から祥瓊が訪ねてきたとは一切聞いていないぞ？…ああそうか、祥瓊だから官邸にいれたのかな？仲間だしな。」

言つて、熊は笑うような顔をした。祥瓊はどういう態度をとつたらいいのか分からなくて、ばつが悪そうにしていた。

やがて息を吐いて桓タイにもづ一度頭を下げる。

「ごめんなさい。」

「構わんよ。でも珍しいな。いつもは太師府にいるのに。」

「なんとなく、桓タイを訪ねたくて来たのよ。」

すでに祥瓊は投げやりな気分になつていた。何を告白しても無礼千方百このうえなしだからだ。

桓タイは前肢まえあしでごりごりと胸をかく。

「うーん、そうか。じゃあ起きて茶でももてなせば良かつたかな？」

「え、いいえ、わたしが桓タイの休息を邪魔してしまつたのだから、お構いなく…。」

言つて、祥瓊はうなだれた。せつかく気持ちよく眠つているところを起こしてしまつた。本当に申し訳ないことをした。

そう言つと、桓タイは言つた。

「どうか？祥瓊と休息を楽しむのも悪くないが。」

言つて、彼は照れたような仕草をした。そして官邸の入り口のほうを見る。

「もうすぐ午後の政務の時間だな。少し待つてくれ。着替えてくるから。」

言葉を返す間もなく桓タイは臥室（寝室）に向かつていった。

やがて戻ってきた桓タイは皮甲（鎧）をまとつた軍人の姿だつた。
もちろん人の形である。

「午後は軍の仕事？」

祥瓊が聞くと彼は苦笑した。

「いや、小臣の訓練。」

ああ、と祥瓊は納得する。現在赤王朝の寵臣の数は少ない。多くの官吏たちは王たる陽子を信用しないし、特に処分を逆恨みした連中は陽子に何をするか分からぬ。だから信用の置ける官吏が限られてくる。そのうちの大部分はもと市井の侠客たちだから、礼儀作法から、兵士については武術まで最初から仕込まねばならなかつた。しかも仕込むほうも人手が足りず、桓タイが直々に訓練しているといふことだつた。ちなみに女史だつて祥瓊一人しかいない。

「忙しいわよね。小臣の訓練までしていたら。

息を吐きながら祥瓊が言つと、桓タイは苦笑した。

「まあな。それに主上のすとれすの発散相手になることもあるから、けつこう疲れるんだ。」

「ああ、それで寝ていたのね。本当に邪魔してごめんなさい。」

祥瓊はもう一度頭を下げて、そして首を傾げる。

「でも、すとれす、て何？」

言つと、桓タイはくすりと笑つた。

「さあ。なんだかムシャクシャした感じだ、と主上はおつしゃつていたが？」

「蓬萊の言葉よね？」

陽子が言つのだからそうだらう。桓タイはあちらの方向を向いて首を傾げた。

「だと思うが？」

言つて、笑う。

「そういえばこの前も何かおつしゃつていたな。はん…何とか？」

「はん…あちらつてどんな世界なんでしょうね…。」

「そうだな。」

桓タイと一人で様々な想像を巡らせていくと、やがて彼がそろそろ行くかと言い出した。祥瓊はうなずいて、桓タイの後ろにつきながら廊下に出た。

出たところで祥瓊は素直な気持ちを口にした。

「桓タイ、ありがとう。」

言つと、桓タイは目を丸くする。

「どうした？ いきなり。」

祥瓊は紫紺の瞳を桓タイの目に合わせる。

「これまでも、これからも貴方にはお世話になると思う。だからお礼が言いたかったの。」

桓タイは目を丸くしたまましばし固まつて、やがてやんわりと笑んだ。

「それはお互い様だ。」

桓タイの笑みにつられて祥瓊も笑つた。桓タイは笑んだまま、祥瓊に尋ねた。

「祥瓊は今、幸せなんだな？」

言われて、祥瓊は苦笑した。

「やっぱり聞こえてたのね。」

頬がほんのり赤くなる。

わたしは幸せ者だわ。

桓タイの隣でつぶやいたこの言葉は、しつかり彼の耳に届いていた。うなずいて、祥瓊もまた問い合わせた。

「桓タイは？」

「ん？」

「貴方は今、幸せかしら？」

桓タイは照れたように微笑んだ。

「うん、まあ、幸せだよ。…半獸が禁軍將軍になれたのだから。」

その言葉に祥瓊は一瞬目を伏せたが、すぐに笑顔になつた。

「この人が幸せだと言うなら、それでいい。」

禁軍と言つても、やはり半獣は差別される。桓タイが決して少な
くない数の官吏に歓迎されていないことは知っていた。

それでも彼は笑つてゐる。

ならばそれでいい。

祥瓊は言つた。

「もし、何か悩みがあつたら、わたしでいいなら相談に乗るわ。」
祥瓊はこれまで桓タイたちによつて多くのことを助けられてきた。
だから次は自分の番だ。

桓タイはやんわりと笑んだ。祥瓊の一一番好きな笑顔だ。

「じゃあ祥瓊も何かあつたら言ってくれ。相談に乗るから。」

そう言つた彼の笑みがまぶしかつた。

「ありがとう。」

笑みを浮かべて言つて、祥瓊はそろそろ行くわね、と言葉を残し
て内宮の奥、陽子の執務の間へ行こうとする。桓タイもまた、じゃ
あな、と言つて反対方向、外宮へ向かつた。

祥瓊は歩きながら思つ。

わたしは幸せだわ。だから自分のなすべきことをしなくては。

仲間とともに。

半獣の友とともに。

完

終章（後書き）

読んでくださった方々に厚く御礼申しあげます。誠にありがとうございます。
「」でございました。

特に「」感想を下さった方、お元に入り登録をして下さった方には
本当に感謝してもしたりないくらいです。

書き始めた当初、こんなに長くなるとは思っていませんでした。
今読み返せば無駄なことをたくさん書いてしまったと思います。
それでも楽しんでくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4989v/>

半獣の友

2011年10月8日21時40分発行